



リステラス星圏史略
古資料ファイル 4 - 2
『宝玉物語』

(発掘整理一旦終了)

霧樹里守 & 土岐真扉

《 大 地 世 界 》
物 語

『宝玉物語』

『宝玉物語』 ～ルマルウンのかけら～ 1. 旧街道... (専門学校～同人誌時代?)

[『宝玉物語』 ～ルマルウンのかけら～ 1. 旧街道...](#)

2016年4月8日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

『宝玉物語』 ～ルマルウンのかけら～

1.

旧街道...と何故かそれは由緒ありげな名で称ばれていましたけれども、それ程に太いものでも、重要なわけでも、決してありません。ただうねうねと山間（やまあい）を縫って続き、緑のなかに奥深い村と村とを継ぐ、ひとすじの辺鄙な交易道にすぎないのでした。山また山という古く緑ヶ森の懐にいかにも細々と伸びくいこんで、その先はやがて人族の入る能わざる禁断の神域マドリアウイ。白雪を頂く峨峨たる山塊の立ちあがるあたりにまで至っていつしか高野の草深いなかに消えて行くという、何の変哲も無かろう辺境の山道なのでありました。

その道を、このあたりではもうごく珍しい平原育ちの軽毛（かるげ）の馬で辿って行く一騎の若者がいます。すでに幾日も幾日も、一夜ごとの簡易な宿場さえが絶えて久しい

(アニメ化！用「脚本」初期型)

『宝玉物語』

(アニメ化！用「脚本」初期型)

草に埋もれた山奥の古い街道を、黒馬にまたがって若者が上ってくる。その目の前に突然姿を現す少女。荒削りな木の弓を持ち、狩の服装（いでたち）をしている。風に髪がなびく。

「ようこそ、旅の御方！ この"道の果ての村"へまでも何の御用でいらせられましたの？」

不意の出現に驚く若者。

『いらせられましたの、ましたの、の...』

木霊を従え、澄んだ笑い声を響かせながら、信じられない程の身軽さで少女は村の方へと峠を駆け下って行く。

村。長の家で、女達は客人の歓迎の仕度に忙しく立ち働いている。土間の火の側で床几に腰をかけている若者と長。長は片手で白髪をかき上げ、山国のなまりのきつい言葉で嘆息をつく。

「だは...失われし白き都サからの、落人のひとりでおざらっしゃるか...生き別れになった妹様を探されて、のう。」

「ええ。酷い戦いでした。必死で逃げのびるうちに離れ離れになってしまって...生きてる筈だとは、思うのですが」

かすかに疲れたような微笑。

「ほんにお気の毒な事じゃに。わしも、話には聞いておじゃりませうがのう。...まったく、ボルドムがこのダレムアスに攻め込んで来ようだは...嫌な世の中サなったもんじゃ、嫌な世の中サ...」(半ば独白。)

向こうの戸口を軽々と押し開けて白い装束の少女が家の中に入って来る。手に皮袋を下げて、女達に声をかける。流暢な都（みやこ）ことば。

「小母さん、小母さん、薬酒を持って来たわ。大層お疲れのようだったから、あの旅の御方に」

「ああよぐ気がつぐねえ。わだしゃ今手サ離せねえだから、差し上げで来とぐれ。」

少女は肯いて勝手に知った物腰で台所に立つ。皮袋の中味を火にかけた鍋にあけ、温めなおす。そんな様子を遠目に追う若者。呟く。

「...あの少女...」

客人にあてがわれた寢室。旅装を解き、寝台に腰を降ろしてくつろいでいると、戸を叩く音がする。少女の声。

「旅の御方」

「開いていますよ、どうぞ。」

少女、湯気の立つ薬酒の盆を片手に入る。

「何か足りないものはありますか？ 長から言われて、あたしが御身の回りの御世話をする事になったのですけれど」

若者は相変わらず少し驚いたような表情で少女を見つめている。

「本当に良く似ている...あ、いや。」

「村の薬師でマシカドリーシャ・サユライって言います。村の者にはマシカって呼ばれてますけど」

「マシカドリーシャ...星の娘？」

後ろ向きに薬酒の盆を置こうとしかけた少女は、ふっと首だけ振り向いて微笑んだ。

「ええ。変わった名前でしょう？ あたし本当の親の名前も顔も知らないんです。だから...」

白い細い指で薬種をつぐ。

「旅の御方は、御名前は？ 良ろしければ教えて頂けませんか？ 騎士様」

「え？」

「隠されても無理ですわ。なんとなくあたしには判ってしまうんですもの。ルア・マルラインの...王様の白い都でも、かなり良い御家柄の方なんでしょう？ 違います？」

若者、苦笑して。

「参ったな。わたしの化け方はそんなに下手なのかな？」

...ミルドーとメレアの息子、ミヤセル・アテナンだよ。若騎士十人隊長だった」

「ミヤセル？」

少女はこくと首を傾けて少し不思議そうに相手の眼をのぞき込む。若者が目をそらす。

「いいわ。それでは若騎士のミヤセルさま？」

おどけた調子で薬酒の椀をさし出す。

「お飲みなさいませ。体が暖まってぐっすり眠られますわ。明日には疲れもとれましょう。...それじゃ、おやすみなさい。」

どこで覚えたのか清楚に宮廷風の礼をして、あっさり出て行く。その後ろ姿を見送って椀を飲み干す。やがて明かりが消され、月明りに沈む部屋の中、静かに眠りにつく。

「お兄さま！ お兄さま！」

夢の中を駆ける、緑の髪の子。父。母。

平和な光景は直ぐに破られて戦争の記憶。うなされて飛び起きる。

少女は窓辺でぼんやりと満月を見ている。
胸元に下げた丸い袋を無意識になでている。

宝玉物語 - ルマルウンのかけら -

scene. 1. 街道

登場人物：マリシアル（ミヤセル）

ダレムアス。ミアテイネア地方はミアトの国。
あたり一面のっぺり緑の山また山の辺境。気節は春。

谷の早瀬につかず離れずで山奥へと伸びている一筋の古びた細い街道がある。
その道を一騎の少年がくたびれた旅装でたどって行く。
馬はこのあたりでは珍しい平原育ちの大型馬。黒毛。
彼はもう何日も何日も野宿を重ね旅を続けているのである。

（日数をどうアニメで表現するかなんてことはあたしは知らない。）

森の中は萌え出たばかりの若葉に花々が明るく美しい。鳥や小獣たち。
路傍に見事に紅い花の小群落があるのだが、旅人は道を急ぐばかりで足をとめもしない。

街道がゴツゴツした岩だらけの川原にしばらく近づいている場所がある。
若者は太陽の位置を見上げ、昼餉をとるために降りて行き、火を起こす。
鞍から下げてあった山鳥の羽根をむしって火にかける。
その時ぶつぶつと呪文のようなものとなえる。

焼けた山鳥をかじりながら膝の上に地図をひろげる。

「次の村まであと二日、か。」

ふっと眼を遠くへとぼす。うつろに、ねくらあ〜く。

山鳥の残骸を焚き火に放りこむ。
水筒を口にあて、空になっているのい気づいて水辺に降りて汲む。

ついでに顔を洗って、何事かをふっきるかのように首を振る。

焚き火の跡と山鳥はきちんと土に埋められ、再び馬に乗って街道に戻ろうとする。

先程の川は背後。

街道の頭上あまり高くはない所はかなり大きなくもの巣がかかっている。

彼は破らぬようと馬の首を低くさせて通る。

宝玉物語 － ルマルウンのかけら － (scene.2. 村)

[宝玉物語 － ルマルウンのかけら － \(scene.2. 村\)](#)

2016年4月14日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

宝玉物語 － ルマルウンのかけら －

scene.2. 村

登場人物：村長（むらおさ）、鬼の手下その1、マリシアル、マシカ、etc.。

（村の風景。晩春。人々は皆山へ入ってしまったものか静かな午下がり。

下の村の広場近くにあるひときわ大きな長（おさ）の家。のきの陰から低い話し声が聞こえる。
）

使いの下魔1「だからよォ、悪い話じゃあるまい？ 王はちゃんと正室に迎えるってエ言っ
た。つまりは我々鬼族の王妃だぜ、えっ。婚儀もちゃんとおめーらのしきたりに乗っ
ってやろうてえ、ありがてえお言葉なんだ。たかが人間（ダレムアト）の、小っぽけな小娘
ひとりによォ」

村長「話はよく解った。しかし...」

使い魔「おうおう、まさか断ろうってえ、つもりでもあるまいな。こっちが下手に出
て、わざわざおまえさんに仲人に立ってくれってえ、願い出てやってるんだ。さっさと
ひっかついで、さらっていきゃあ、あんな小娘ひとりだ、話も早いのによ。まさか、ひ
とつの村の村長ともあろうもんがよ。そこんところの王のおやさしい気づかいが解ら
ねえはずはねえよな。断ろうなんザァ、まちげえても考えねえよなァ」

（ねちっこく。村長、ひきつったまんま、無言。使い魔、続けて）

使い魔「それとも村長さんよ。みなし児の、何処ン馬の骨ともわかってねエ娘っコ
のために、血のつながった村人みんなを犠牲にしようたァ、まさか考えたくねえだろ」

（村長、ぴくりと眉をひきつらせて）

村長「マ・シカは、この村の娘だ！」

使い魔（少したじろいで）「そ、そうかえ。なら、余計にだ。小娘だって自分ひとりのために、育ててくれた村を潰されちまうのは、嫌アだろうよォ。」

（家の反対側から女の声）

村長の妻「あんだア、あんだ。どこに居（お）いでじゃあ？ 旧街道サ上って、旅のお客人が...」

使い魔「...チェッ。人が来た。まアよく考えて見るんだなア、急な話だしよ。ひとつきしたらまた来るぜ。」

（使い魔、ぽんと空中で一回転して九官鳥のような太った黒い鳥に姿を変えると、のき下からバタバタと昼の光の中へ飛び出して行く。）

使い魔「おっと、例の小娘だ」

（呟いて、数間離れた木の枝に翼をとめる。眼下の川端でマシカ、薬草の束を流水につけてさらしながら、集まって来たもっと年の下の子供達に昔話をしてやっている。）

マシカ「それ故に女神は激しい戦いの後、ボルドムの主神ボルドガスドムをたおし、ボルドムの世界との間にあった通路の全てを、精霊ストランアイタに命じて閉ざさせておしまいになりました。と...さあ今日はこれでおしまい。あたしピムネの薬の煮えぐあい調べてこなくちゃ」

（マシカ、立ち上がり、村への坂をのぼって行く。使い魔、見送りながら肩をすくめて、）

使い魔「ロリコン奴（め）。」

（使い魔、飛び去る。）

[宝玉物語 - ルマルウンのかけら - \(scene.2. 村\) \(続き\)](#)

2016年4月14日 [ヒロシマ+ナガサキ<フクシマ=【地球】!!](#)

(村長の家。戸口の前で若い旅人が馬を降りる所。長、馬の手綱をとっている。)

村長「こん"道の果ての村"サまでもようようおいでじゃ。旅のおかた。わしがここの村長をば務めておりましたな。モルテンとマイダンが長子、モルドントばと言いますじゃよ」

マリシアル「ミルドーとメレアの息子、ミヤセルと申します、長。マルラインの生まれの者です」

村長「.....ルア・マルライン.....！」

(長の顔色、かすかにいたましげなものに変わる)

村長「だは...失われし皇都(みやこ)からの、落人(おちうど)のおひとりでござらっしゃるか。わしも、話には聞いとりましただかの。ほんに...
ともかくも、その御様子ではよほどん疲れはてられておいでじゃろ。話ばゆっくりされてからでもできますじゃろ。ささ、中へ中へ。」

(妻に向かって)

村長「メッデーア、早うお湯(ぶ)の仕度サせば。」

(3人、中へ。川辺から上がって来た子供たちが珍しげにその後を見送っている。青年が一人出てきて旅人の馬を厩にひいてゆく。)

(炉ばたの前でマリシアルはまだ濡れたままの長い髪をしきりとふいている。長は暗い顔をして。周囲では何人かが食事の仕度をしたり狩の道具の手入れをしたりしている。)

村長「だは...あの戦いば時に生き別れサなった妹様ば探されて、こん山ん中まで上っておいでんかったか」

マリシアル「はい。本当なら、もう半年も前にミアトの都で、落ち会っていた筈なのです。風のうわさでこの村に、不思議な力を持つ忘れ病の少女がいると聞きました。それで…」

村長（首をふって）「いんや。…あの娘が先のおばばどんに連れられて」

（村の光景。長は暗い顔で狩に行く仕度をしている。周囲に幾人か村人。薄闇になった軒下から不意に使い魔が顔を出す。 9

使い魔「よォ…村長さんよォ。こねーだの返答をもらいに來たぜ。娘っコをよこすけえ。よこさねえのけえ。」

長（ぎょっとした表情で）「おめえが…!!」（嫌悪むきだし）「けえれ！とっととけえるんだ！何度來（く）っとも返事ば変わりやしねえ！」

使い魔「ほーほー、ふ～ん。そーゆーこと言っちゃまっていーのかいねえ。村の安全てもんが…」

長「あん娘ば誇りの高え、生粋のダレムアスの娘っ子だば、誰が鬼どもの嫁になぞ」

使い魔「チッチッチ。時流ってもんが解ってねーんだな、じーさん。まあ、あの娘っコもまだほんの小娘だ。鬼王ももうちょい年頃になるまでは待ってやってもいいとのおことばだ。よっく考えるんだねえ、鬼の王の妃か、村中皆殺しか？

血もつながってねえ娘っ子ひとりこの村と、どっちが大事かねえ？」

長「マシカはこの村の娘だ！」

（使い魔、耳ざわりな笑い声をのこして去る。長、無言で斧を握りしめている。やがて皆に振り返って。）

長「いいが。誰も、ぜってえに、マシカにこのごとを言うんでねえぞ。」

（村人たち、一様に重い顔で、しかしうなづく。）

満月の晩。山深い森の奥。（高校～同人誌時代？）

[満月の晩。山深い森の奥。（高校～同人誌時代？）](#)

2016年4月14日 [リステラス星圏史略](#)（創作）

満月の晩。山深い森の奥。土をかぶせた焚き火のかたわらに若者が眠っている。夢の情景（シーン）。

緑の豊かなまき毛をひるがえして女の子が城の庭を走りまわっている。さんさんと降りそそぐ陽光。笑い声。もう少し幼い頃の若者がいる。

女の子「お兄さま！お兄さま！お待ちになってったら、ねえ！」

笑って逃げる若者へめがけて信じられないほどに高く空へ翔びあがる女の子。受けとめようと伸ばされた腕の中へ。

若者「そんなにも高く大地から離れて！恐くはないのかい？」

女の子「平気よ！私は飛仙族（エルフエリ）たるお母さまの血を濃く継いで生まれついたのであるもの！」

幸福な兄妹。それを遠くから見つめている両親。4人とも、額に高貴な身分であることを示す布飾りを巻いている。

遊びつづける兄妹。その背景で人の動きが慌ただしくなる。両親のそばにはもう1人の貴人（飛仙）がつきそっている。

大人たちと共に会議の卓を囲む若者。苦悩の表情。

ひとり庭で遊ぶ女の子。ほがらかに笑って振り返りかけ、凍りつき、恐怖し、やがて悲鳴をあげる。

炎につつまれた城の光景。おしよせる鬼ども。切り殺される両親。兄妹は剣をとって逃げのびるべく戦っている。乱闘のなか、つないだ手がはなれ、呼びあいながらも次第に遠ざかって行く2人。消えて行く声。

音の子「お兄さま！お兄さま～っ！」

暗転。がバツと飛びおきる若者。朝もやのたちこめる森。焚き火からひとすじの煙がたちのぼっている。枝につながれたみごとな馬が気づかわしげにいなないて地面を搔く。

森の小径。木の間ごしの日差し。（高校～同人誌時代？）

[森の小径。木の間ごしの日差し。（高校～同人誌時代？）](#)

2016年4月14日 [リステラス星圏史略](#)（創作）

森の小径。木の間ごしの日差し。曲がり角のむこうで2人の人間が言い争っている。しげみにさえぎられて、白いほっそりした脚と、真っ黒なマントのすそしか見えない。

少女「何度言われようと無駄ですわ。大体、誇り高き大地の乙女あいてに、よくも恥を知らずにそんな話をもちかけられたものですわね！」

鬼王「わたしは忍耐深い方だが、それもそう長くは続かぬぞ。おまえが心良く承知すると言えばよし。この"道の果ての村"の者どもは花嫁の親族として、無理な税も手下どもの略奪狼藉からも免れよう。したが本気で否と言うのならば...」

少女「卑怯者！」（唇を噛む）

鬼王「判っておろうな。...人が来たようだ。おまえは未だ幼い。婚礼もすぐにとは言うまい。だが、自分がこのわたしの妃となるべき身なのだということだけは、十分にわきまえておけよ。」

黒い影、煙となって消える。怒りを抑えてふるえている、白い服、黄色い髪の少女の後ろ姿。ゆるやかに近づいて来るひづめの音。

少女の足もとに村と谷の光景がひろがっている。

黒馬にまたがり、疲れた旅人姿の若者。

若者「もし、すこしお尋ねしたいが、この村はなんという...」

少女、髪をひるがえしてあざやかに振りむく。意志の強い、幼いけれども見事に整った表情。

どことって似たところもないのだけれども、一瞬、妹と面影が重なり、若者は驚く。

しばらくの沈黙。少女、微笑む。

少女「お礼を申し上げますわ。旅の御方。あなたのおかげでとりあえず助かりました。」

若者「助かる？　そういえば、なにか言い争う声が聞こえていたようだが…」

少女「なんでもありませんの。それより」

少女、しげしげと若者を観察し、やがてつと細い腕を伸ばして若者の右肩に触れる。

若者（痛そうに）「うっ！」

少女「…やっぱり。なにかの怪我を、なおりきらないままに無理をして、こんな山奥にまで旅をして来ておいでですね。疲れがたまって熱も出ておいでなのでしょう。たぶん、相当ご気分もよくないはずですわ。」

若者（驚いて）「…な…。よく、貌を見ただけで、それだけ…」

少女「わたしはこの村の薬師を務めているんですわ、旅の御方。医薬を司どる神ヨーリヤ様の御名にかけて、お怪我がすっかり治りきるまでは、あなたをこの村からお出ししませんから、そのおつもりで、どうぞ。」

にっこり笑ってさっさと馬のくつわをとる少女。若者、その横顔を見おろしながらやれやれという風に苦笑して、大人しくひかれていく。

部屋の中。むりやり寝台に寝かされている若者と、包帯を巻きなおしている少女。

少女「思った通りですわ。あと3日も放っておけばえそを起こして、お命を落とすところです。無茶ですわ。これほどの刀傷をろくに養生もなさらず、手当さえおざなりなのですから。」

若者「すまない。つい心が急いてね。」

少女「それならばなおさらですわ。何をお急ぎの旅かは存じあげませんけれども、まさか"神々のおわしたまわぬ死後の世界"が目的地なわけでもございませんでしょう？」

少女、心配そうにのぞき込む。若者、笑う。

若者「まったくだ。…」

その手に杯がさし出される。

少女「どうぞ。薬酒ですわ。とても効くんです。」

若者（香りをかいで）「ミアマアセラスだ。さすがミアトの国だなあ！」

少女「平地の方なのに、この薬をご存知？よほど裕福な家でお育ちになりましたのね？旅の御方」

若者「あ、いや、そういうわけでは...」

不必要に慌てる。少女、キョトンとして、若者の肩に布団をかけなおす。

少女「とにかく今日はもうお休みなさいませ。ミアマアセラスの薬効はとても高いのです。明日には熱はもう下がっているはずですわ。」

立ち上がって戸口まで行く。

若者「あ。待ってくれないか！」

少女（振り向く）「はい？」

若者「礼を...まだ言っていなかったと思うのだが。わたしは、ミルドーとメレアの息子、ミヤセル・アテナムンという。戦の前にはルア・マルラインに住んでいた。」

少女「ルア・マルライン...失われた皇さまの都！」

（さっと蒼ざめる）

若者「そう。...あなたは？」

少女「わたしは、ただマシカとだけ呼ばれています。この村の薬師ですわ。」

若者「マシカ... "お星さん" ? それはまた、ずいぶん変わった...」

少女「ええ。でも、礼を欠いて申しわけありませんけれど、わたしの名前のお話をはじめると、長くなるんですわ！ お治りになったら、ゆっくりお話ししてさしあげます。今日はもうおやすみなさいませ。」

すこしおどけたように優雅に宮廷風の礼をして出て行く。それを見送って、

若者「...本当に似ている...」

再び若者の夢。（高校～同人誌時代？）

[再び若者の夢。（高校～同人誌時代？）](#)

2016年4月14日 [リステラス星圏史略](#)（創作）

再び若者の夢。妹と少女の姿（イメージ）がチラチラとうつりかわる。

やがて場面は移って賢人会議の席。両親とあともうひとりの飛仙の姿が（体だけ、とか、後ろ姿とか）見える。

若者「反対です！いくら...いくら、このダレムアスの平和のためとはいえ...遠いモルナスの国へ、顔も知らぬ相手のもとへ、あの子を嫁がせるなど！」

大人たちは静かに首を振る。

かたい表情の華やかな旅装の女の子。婚礼の行列。馬上の妹。

若者「行くな！行くんじゃない！だめだ、マ・リ...」

振りむく妹。若者に呼びかける声がきこえる。はじめ小さく、だんだんはっきりと。

少女「...さま。ミヤセルさま！」

若者、ぼうっと目をあけて、白い細い顔を認める。

若者「あ。...」

その額に浮いた汗を穏やかにふきとる少女。

少女「お起きなさいませ。朝ですわ！」

窓ごしに朝の陽光がさしこみ、鳥の声や村特有の人々のざわめきが聞こえる。

少女「熱はもうすっかり下がりましたわね！」

はるかに望まれる白銀の雪の神域マドリアウィ。それに連なるミアトの国の山々。一筋の川。そうして小さな村がある...

村の情景。家々の屋根からは細く煙が立ちのぼる。静かな昼下がり。そこここに畑仕事や狩道具の手入れなどする人影が見える。

村の通りを少女が空の薬草かごを負い、山仕度をして歩いている。途中、若い母親に赤ん坊をさし出され、包帯を巻きなおしてやったりなどしている。村人がはなしかける。

村人「そういえばマシカ、あの、村長（むらおさ）ンとコンさいる、あんたの患者なあ、なんといったっけか」

少女「ミヤセルさまが？」

村人「そうそうそん旅んおひと。もう大分よくなったみたいで、今朝がたそんあたりを歩いてさっしやったがの」

処女「まあ…」

村長の家の裏手。土堀のむこうから声。

若者「もう大丈夫ですよ、おかみさん。これくら手伝わせて…」

とめようとする村長の妻をしりめに、若者が薪割台の前で斧を手にしている。裏木戸に少女が現れる。

少女（心配。とがめる口調で）「旅の御方。」

若者「これは、マシカどの。」

少女「無茶でございますわ。旅の御方。きのうまで高熱で臥せっておいでだった方が…」

言いながら裏庭をつっきり、有無を言わず斧をとりあげ、若者の額に手をあてる。

少女「まあ、すっかり下がっていますのね！」

部屋の中。縁台に腰かけて、若者が包帯をまきなおしたあとの衣服をととのえている。

若者「言ったでしょう。わたしは普通よりも治りが早い。」

少女「本当に...わたしエルフエリと動物たち以外で、あれだけの傷が翌日にはふさがっている方なんて、はじめてお会いしましたわ。」

若者「エルフエリを診たことがあるの？まさか！」

少女「まあ。ふふ...。でもそれにしても、あと10日ばかりは右腕をお使いになってはいけませんわ。」

少女「ミヤセルさま。信じて下さいます？ わたし、10日間だけ、伝説の妖精の一族・エルフエリの、それも若長かなにか、きっと身分の高いお方と、一緒に居たことがあったんですわ...。」

(むかいの山の方を指さす。)

少女「御覧なさいませ。あそこにひときわ高くそびえるこずえがありますでしょうか？あの、榎の木のはえている場所に、星ヶ沼という、古い古い泉があります。昔からいろいろ不思議なことが起こるといわれている場所で、代々の薬師たち以外は誰も近寄りません。聖なる山マドリアウイに近すぎるせいですわ。」

木洩れ陽が2人の顔を踊る。(高校～同人誌時代?)

[木洩れ陽が2人の顔を踊る。\(高校～同人誌時代?\)](#)

2016年4月14日 [ヒロシマ+ナガサキ<フクシマ=【地球】!!](#)

木洩れ陽が2人の顔を踊る。若者を世界を見渡して。

若者「...いい空だ...」

なにも言えずにうつむく少女。

少女「でも！これからですわ。我らが王子殿下だけは無事にいずこにか落ちのびられて兵を集めておいでだという、あのうわさは、ミヤセルさまもきੱご存知でいらっしやいますでしょう...? 今にきੱご、昔のように、平和な...」

若者の一種びみょーな表情に気づいて口ごもる。

少女「...そういえば、これからどうなさいますの、ミヤセルさまは？ ここは旧街道の"道の果ての村"。ここから先の旅は、もうありえませんわ。」

若者「そうだね。山を下ってまた別の街道をたどってみるか、それとも...。」

若者「どちらにせよ、旅は長く、わたしは疲れすぎた。心がきまるまでのしばらくの間は、せめてこの美しい村にいて何も考えずに、体をやすめることにするよ。」

ふっと2人の視線があい、やがてどちらともなくあたりに目をうつす。

山道を歩いていくふたり。

半月。村の下の川辺で夜釣りをしている若者。小さくうずくまり、川の静かな波光が底のない黒い瞳に映ってゆれている。背後で遠慮がちに小さく呼ぶ人影。

少女「ミヤセル。ミヤセルさま。ミヤセル。...やっほーっ...」(肩に手を置く。)

若者（びくっとして）「あ、ああ。マシカ。驚いた。」

少女「何をそんなに考えこんでいらしたの、おかしなミヤセルさま。何度も呼んでいますのに、まるでご自分の御名前ではないように平気な顔をして」

必要以上にぎくりとした様子の若者。いぶかしむように笑いながら少女が隣に腰をおろす。

（やっぱり村長とのはじめの2シーン、入れること。）

※さらわれるシーンの別稿※

夜の森。寄りそってすわっている若者と少女。銀色の満月。雲ひとつない星空。

若者「...そうすると、そこへ妹がぐうぜんやってきて...」

少女（笑って）「また妹さまのお話ですか？ さぞかし御自慢にしてらしたんでしょうね！」

若者「そりゃあもちろん。マーライシャは...」

少女、はっとしたような、けげんそうな瞳で若者を見あげ、離れる。若者がしまったという風に口をおさえるのを、少女はまじまじと見つめている。

少女「...妹さま、皇女殿下と同じ御名前ですね...」

[『宝玉物語』 （初期型？没原稿@高校？） 0](#)

2016年5月12日 [リステラス星圏史略 （創作）](#)

満月の晩。客用寢室に眠るマリシアルの寝顔。夢の情景がオーバーラップ。

平和な城の情景。陽ざしの明るい中庭を少女が走っている。緑色の髪。

妹「お兄さま！ 待ってよ、お兄さまったらあ！」

少女が、もう少し幼い頃のマリシアルに跳びつく。

子供達の両親がそんな様子をかたわらで眺めている。

皆、冠を戴き、高貴な服装をしている。

妹「お兄さ... きゃあぁー!!」

振り向きかけて蒼白、絶叫する少女。

一転して場面は混沌と崩壊の城中。

凶刃に倒れる両親。

城の燃える炎。

猛火の照り返しのさなか、人波に流されて離れて行く少女。

妹「お兄さまぁー...！」

遠くなる声、消える。

若者「 ! うわぁぁぁぁあっ！」

飛び起きる。

見馴れない部屋＝客用寢室。
閉ざした窓から明かりが洩れている。

起きだして開けると外はすでに朝。
井戸で水を使っている村人達の姿が見える。

地味な緑や茶色の山着姿にまじって、ひとり白の長衣を身につけた少女、振り向く。
明るい朽葉色の髪をのぞけば、夢の中の少女に顔形から年格好までがそっくりである。

驚くマリシアル。

少女、歩み寄って来る。

少女「お早うございます、旅の御方。よく眠られましたか？」
若者「あ、ああ...」（まばたいて肯く。）

若者「お早う。山へ入るのかい。このあたりにも鬼の一隊がうろつくので危ないと聞いたけれど」

少女（身振りで眼下の早瀬と彼方の雪の峰を指して）「この川のこちら側なら大丈夫なんですわ。神の山から流れだす聖なる水ですもの。鬼達には超えられません。それに... どちらにせよ、あたしには無闇とは手出しをしないので」

ふっと遠くを視る眼つき。
マリシアルは魅入られたようにその顔を見つめている。

少女（微笑んで）「...しばらくこの村で旅の御疲れを癒されるのだとお聞きしましたけれど。よろしければ一緒にいらっしやいませんか？ あたし、このあたりを案内してさしあげられると思いますわ、旅の御方」

会話をしながら村をぬけて歩いて行く2人。

山道を並んで歩く2人。

少女「それではミヤセルさまは、戦で生き別れになった妹さまを探して...？」

若者「旅を続けているというわけかな。もう、6年にもなる。私達は昔、マルラインに居たんだ」

少女「ルア・マルライン...失われた王さまの都...！」

少女「それでは、戦の初めの、あの奇襲の時に...？」

若者「あれは戦なんてものじゃなかった。一方的な虐殺さ...マシカ。不意をつかれて、逃げのびるだけが精一杯だった」（根暗く）

少女「誰が想像しましょう？ ミヤセルさま。鬼の国が、この平和なダレムアスに攻め入って来ようなんて。...それでは、妹さま...」

若者「生きては、いる筈なのだが」

道の途中、片側が崖になって視界が開ける。

広々とした景色。

えんえんと連なる山なみ。

木洩れ陽が2人の顔を踊る。

若者、世界を見渡して、

若者「...いい空だ...」

少女、なんにも言えずにうつむき、呟く。くやしそうに。

少女「イヤな戦!!」

高台から四囲を眺めやる2人。眼下に村。

小屋で機を織る少女と、窓越しに話しかけている若者。

薬草の調合をする少女を、若者が手伝っている。

夜釣に出かける2人。欠け始めた月。

(他、適当に「段々親しくなっていく」描写。)

(アニメの手法なんか、あたしにゃわからん。)

川原にて。白っぽい小砂利の敷かれた場所。

束にして流れにさらしてある毛皮や薬草。

崖の下の位置からは村は見えない。

緑の山と青い空。

子供達が唄いながら遊んでいる。

ぼんやりと腰かけてそれを眺めている若者。

先刻からしきりに少女が呼んでいる。

少女「ミヤセル、ミヤセルさま？ やっほーミ〜ヤセ〜ルっ！」(ふざけて)

少女、若者の肩に手を置く。若者、ハツとして、

若者「あ、...ああ...、すまない。ちょっとぼうっとして...」

少女「おかしなミヤセール。あれだけ呼んだのに、まるで御自分の御名前ではないみたいな顔をして...」

くすくす笑う。

若者、一瞬、しまったという顔をする。

『宝玉物語』 （初期型？没原稿@高校？） 1

2016年5月12日 リストラス星圏史略 （創作）

少女「どうぞ」

暗転。白い手が若者の前にさし出されて杯を置く。
炉の火明かりをうけてほのかに光る杯。

若者、首をまわして杯を置いた少女の顔を見る。
少女、皆の後ろをまわって一人ずつに杯をくばっていく。

若者、杯をとりあげ、

若者「これは？」

村長「ミアマアセラスの葉の酒でしてな。村ではマシカひとりしか作れんですじゃ」

少女、はにかむように会釈して杯をまわし続ける。
それに見とれ、ぐるっと首を巡らせている若者。

少女「どうぞ。旅の御方」

白い手が若者の前にさし出されて杯を置く。

若者（マリシアル）、顔をあげ、少女（マシカ）と目があう。
驚いたような表情。

少女「薬酒（くすりざけ）ですわ。お疲れがとれます」

少女、軽く会釈して去る。後ろ姿を若者がしばらく見送っている。

場所は村長の家の炉の前。

小卓をはさんで長と若者、椅子に座っている。

広い室内で、周囲では夜なべ仕事の最中である。

少女、料理用の炉の方に戻って女達に混ざっている。

ひとりだけ黄色い髪のため目立つ。

村長「だば、王さまの都からござらっしゃったか。戦（いくさ）ば落人ですじゃな」

若者（現実に引き戻されて、慌てて）「ええ... あれはひどい戦いでした。奇襲を受けて...」

村長「誰がいつでえ考えますじゃ。鬼どもば国がこん平和なダレムアスば攻めてくっだば。こんごろだは、ここらまで鬼どもがうろつきますじゃ。昔々ん戦いで山ん中ば逃げのびて隠れでおったのが、都の方は鬼の国に奪られだどだん、凶太くなつて人里さまで出てぐるようばなりおじゃりましでな」

若者「それは... 本当ですか」

村長（すがりつくように）「旅ん御方。都ばから来だあんだ様なら御存知でござらっしゃろ。王子ぎみと王女ぎみば御無事じゃゆう、あん噂ば本当でおじゃろうが。ほんどうに、生きてさっしゃるのじゃろうが」

若者「ええ。確かに王子は御無事で落ち延びられたという話です」

村長「おお... 女神マリアンよ...！」（祈る）「それで。わしらが王女ぎみは」

若者「生きては... いるはずなのです。が、行方が知れません」

村長「お行方が...」

村長、椅子の背にもたれかかる。若者、辛そうに顔を伏せている。

村長「嫌な時代ばなったものじゃ。...嫌な時代ば...」

そんなやりとりを少女が遠くから見つめている。

[『宝玉物語』 \(初期型?没原稿@高校?\) 2](#)

2016年5月12日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

マリシアルの寝顔。

~~夜。満月。客用寢室で若者は眠りについている。~~

(夢) 平和な城の光景。

夢の中を陽光を浴びて女の子が走っている。

髪が緑色なのを除けば先刻の少女に瓜二つな顔立ち。

ほがらかな笑顔。

女の子「お兄さま! 待ってよ、お兄さまったらあ!」

女の子がもう少し幼い顔の若者に飛びつく。

子供たちの両親がそんな様子を傍らで眺めている。幸福な光景。

大人2人は冠を戴き、高貴な服装をしている。

女の子「お兄さ... きゃあああああー!!」

振り向きかけて絶句する女の子。刃に斃れる親たち。城の燃える炎。

女の子「お兄さまあーっ!!」

遠くなる声。消える。

若者「うわあああああっ!」

飛び起きる。客用寢室。

閉ざした窓から明かりが洩れている。

起きだして開けると外はすでに朝。

井戸で水を使っている村人達の姿が見える。

山人姿で髪を束ねた少女が振り返る。

夢の中の女の子と瓜二つな顔立ち。

少女「お早うございます。旅の御方。よく眠られましたか？」

若者「あ、ああ...。」（まばたいてうなづく）

若者「お早う。山へ入るのかい。鬼が出るので危ないと聞いたけれど」

少女（身振りで眼下の早瀬と彼方の雪を頂く峰を指して）「この川のこちら側なら大丈夫なんですわ。神の山から流れだす聖なる水ですもの。鬼族には越えられません。それに... どちらにせよ、あたしには手を出しません」（ふっと遠くを見る顔つき）

~~若者「あなたはまるで都人（みやこびと）のような言葉で話すのだね。このあたりの訛りがまるで無い」~~

少女（微笑んで）「よろしければ一緒にいらっしゃいませんか？ あたし、このあたりを案内してさしあげられると思います」

村を抜けて歩いていく2人。やがて山中に向かう小道に入る。

少女「旅の御方は生き別れになった妹さまを探していらっしゃるのだから長から聴きましたけれど」

若者「ミヤセルだよ。ミルドーとメレアの息子、ミヤセル・アテナムンだ」

少女、若者の顔を軽く見つめて一礼する。

少女「星の娘のマシカって呼ばれてますわ、ミヤセルさま。この村の薬司（くすりつかさ）をしています」

若者「星の娘？」

少女「ええ。あたしは親の顔も知らない拾われっ子なので」

若者、しまったという顔をする。少女は気にした様子もなく微笑む。

少女「お気になさらないで。あたしは十分幸せなんですから」

木立ちが途切れて陽光が少女の髪に降りそそぐ。

(アニメ化！用「脚本」第一稿)

『宝玉物語』

(アニメ化！用「脚本」第一稿)

2016年4月22日 [リステラス星圏史略（創作）](#)

『宝玉物語』（シナリオ）第一稿

満月の晩。山深い森の奥。夜の森の音が聞こえる。

土をかぶせた焚き火のかたわらにマントにくるまって眠っている美しい黒髪の若者。旅の疲れと汚れに少しやつれて、それでも高貴な顔だち。心持ち不安気な表情。油断なく剣を抱いている。

若者の夢の情景。

緑色の豊かな巻き毛をひるがえして女の子が城の庭を走り回っている。さんさんと降りそそぐ陽光。笑い声。もう少し幼い頃の若者がいる。

女の子「お兄さま。お兄さま！お待ちになってったら、ねえ！」

笑って逃げる若者へめがけて信じられないほど高く空へ翔びあがる女の子。受けとめようと伸ばされた若者の腕の中へ。

若者「そんなにも高く大地から離れて！恐くはないのかい？」

女の子「平気だわ！わたしは妖精エルフェリの姫君たるお母さまの血を濃く継いで生まれついたのですもの！」

幸福な兄妹。それを遠くから笑って見ている両親。4人とも、額に高貴な身分であることを示す布飾りを巻いている。

遊び続ける兄妹。その背後で人の動きが慌ただしくなる。大人たちと共に会議の卓を囲む若者。苦悩の表情。

ひとり遊ぶ女の子のイメージ。ほがらかに笑ってふりかえりかけ、凍りつき、恐怖し、やがて悲鳴をあげる。燃えあがる火の手。

炎につつまれた城の光景。おしよせる鬼ども。逃げまどう人々。切り殺される両親。

若者「逃げるんだ！生きて、遠くへ...！」

兄妹は剣をとって逃げのびるべく闘っている。乱争のさなか、つないだ手が離れ、呼びあいながらも次第に遠ざけられて行く2人。

消えていく声。赤黒い炎の城を背景に、溶暗。

女の子「お兄さま！お兄さま！お兄さま〜っ！」

若者「うわあああああっ！」

がバツと飛び起きる若者。朝もやのたちこもえる森の光景。焚き火からひとすじ煙が立ちのぼっている。枝につながれた見事な黒馬が気遣わしげに鼻をならして地面をかく。

(以上、カット。)

森の小径。木の間ごしの日ざし。くねった曲がり角のむこうで2人の人間が言い争っている。茂みにさえぎられて、白いほっそりした脚と、真っ黒いマントのすそしか見えない。

警告するように少女の足もとで小さな獣が牙をむいて唸っている。

少女「何度言われようと無駄ですわ。大体、誇り高いダレムアスの乙女を相手に、よくも恥を知らずにそんな御話をもちかけられたものですわね！」

鬼王「わたしは忍耐強い方だが、それでもそう長くは続かぬぞ。おまえが快く承知するならばよし。その“道の果ての村”の者どもも花嫁の親族として、われら鬼族の略奪狼藉から免れよう。したが本気で否と言うならばだな...」

少女「...卑怯者っ！」

鬼王「判っておるだろうな。なに、おまえは未だ幼い。自分がどれほど幸運な女か...。じゃによって、婚礼も直ぐにとは言うまい。だが、自分がこのわしの妃となるべき身なのだということだけは、十分にわきまえておけよ。

...人が来たようだ。わしはこれで去るぞ。」

黒い影、煙となって消える。

※セリフ短縮のこと。

怒りを抑えてふるえている、白い服、黄色い髪 of 少女の後ろ姿。足もとに草摘み籠がころがっている。

その眼下にひらけている村と谷。

青い空のもと、背後からゆるやかにひずめの音が近づいてくる。

心配そうに鳴く獣。

馬にまたがり、疲れた旅人姿の若者。

若者「もし、そこの娘さん、少しものをお尋ねしたいのだが、ここの村はなんと
いう...」

風に髪をなぶらせて鮮やかに振り返る少女。意志の強い、幼いけれども見事に整った表情。一瞬、妹と面影が重なり、若者は息をのむ。

しばらくの沈黙。少女、微笑む。口を開く。

少女「ようこそ、旅の御方。聞かせてさしあげましょう。ここは辺境。あなたが、たどっておいでになった歩いて来られた街道の行きあたり。ここより彼方は人の道なき神の山。禁断の聖域マドリアウイ。

そうして、この村は昔よりこう呼びならわされていますわ。"道の果てにある村" ...と。」

暗示的にのぼされる白い腕。その上を獣がかけぬける。

背景、パン(?)してマドリアウイの山なみを映しだす。

雪の峰に反射する陽光が一瞬きらめいて、宝玉のイメージにかわる。

宝玉がころがって満点の星月夜に。

水面月がゆらめいて場面は"星ヶ沼"と楡の遠景になる。

白い姿の少女が小さく画面を走りぬける。

『宝玉物語』のタイトル字幕、浮かび上がる...

2016年4月22日 [リステラス星圏史略](#) （創作）

暗転。

ニワトリのときの声。朝の風景。

長の家の一室の窓がバタンと開いて、伸びをするように若者が姿をあらわす。

井戸の順番を待っていた山装束の少女、振り向いて歩み寄る。

肩にとまっている獣。

少女「お早うございます。よくお休みになられましたか？」

若者「お早う。きみはたしか昨日の...」

少女「マシカですわ。旅の御方。この村の薬師をしております。」

（薬草籠を示してみせる。）

若者「山へ入るのかい？ 近頃はこのあたりにまで鬼の一族がうろつくので危ないと、ゆうべ聞いたけれど。」

少女「この川の（身振り以示して）こちら側ならば普通は大丈夫なのですわ。神々の御山から流れだす聖なる水ですもの。並の力の鬼たちには越えられません。それに... どちらにせよ、あたしには無暗とは手出しをしないので。」

ふっと翳るような瞳。若者は魅入られたようにその顔かたちを見つめている。

若者「...似ている。本当に...」

少女「え？」

若者「あ、いや、なんでも...」

少女（ふっとかるく頬笑んで）「よろしければ御一緒にいらっしゃいませんか？ あたし、このあたりを案内してさしあげられると思いますわ、旅の御方。」

若者「ミヤセルだ。ミルドーとメレアの息子、ミヤセル・アテナムン。」

少女（軽く一揖して）「どうぞ、ミヤセルさま。

村の道をつれだって歩いてゆく2人。

晩い春を迎えた山岳地帯の森。花々は咲き競い、草葉の先から朝つゆの最期のしずくがおちて行く。杣（そま）道をふんで歩く2人の姿。

鳥の巢の親とひな。かけて行く兎や仔鹿。

そういったモチーフを背景に画面とは直接関係なく2人の会話が続く。

少女「それではミヤセルさまは戦士で、生き別れになった妹さまを探して？」

若者「旅を続けているというわけかな。もう、6年にもなる。わたしたちは昔マルラインに住んでいたんだ。」

少女「ルア・マルライン...失われた王さまの都...！ それでは、あの戦のいちばんはじめの夜に...？」

若者「ああ、あれは戦なんてものじゃなかった、マシカ殿。一方的な虐殺。みなごろしさ...不意をつかれて、ほとんどの者は殺られた。わたしも、自分ひとり逃げのびさすのに精一杯だった...」（根暗く。）

少女「イヤな戦！なんてひどい...!! 誰がいったい想像できましたでしょう？ ミヤセルさま。鬼どもの国が、この平和なダレムアスの世界にいきなり攻め入って来ようなんて。...それでは、妹さま...」

若者「生きては、いるはずなのだが。」

道の途中、片側が崖になって視界がひらける。広々とした景色。えんえんと連なる山並み。木洩れ陽が2人の顔を踊る。若者は世界を見渡して。

若者「...いい空だ...」

なにも言えずにうつむく少女。

少女「でも！ これからですわ。我らが皇子殿下だけは無事にいずこかに落ちのびられて兵を集めておいでだという、あのうわさは、ミヤセルさまもきっと御存知でいらっしゃるでしょう？ 今にきっと、昔のように平和な...」

若者が何故かふっとたじろいだような、苦しむような表情をする。それに気づいて口ごもる少女。

少女「あ...そういえば、これからどうなさいますの、ミヤセルさまは？ ここはこの旧街道の、"道の果ての村"。ここから先への旅はもうありえませんのよ。」

若者「そうだね。山を下ってまた別の街道を辿ってみるか、それとも...。どちらにせよ、旅は長く、わたしは疲れすぎた。心が決まるまでのしばらくの間は、せめてこの美しい村にいて何も考えずに、体を休めることにするよ。」

ふっと2人の視線が合い、やがてどちらともなくあたりに目を移す。

山道を歩いていくふたり。

わーいっ 2時間だ！2時間だっっ

『宝玉物語』（シナリオ）第一稿 3 （専門学校～派遣ワープロオペレーター時代）

2016年4月22日 リステラス星圏史略 （創作）

夜。欠けはじめた月。村の下の川辺で根暗している若者。

小さくうずくまり、川の静かな波光が底のない黒い瞳にうつって揺れている。

若者「ふふ...いずこかにて兵を集めて...か。わた七皇子は...。」

ピシャリと銀色の魚が跳ねる。

野辺をぼんやりと歩いている若者。少女のしきりに呼びかけている声がある。

少女「ミヤセル。ミヤセルさま。ミヤセル... やっほーっ！」

びくっとして振り向く若者。すこし離れた大樹の下に獣たち鳥たちにかこまれて王女のように座している少女。若者、驚いたように弱弱しく微笑む。

若者「あ、ああ。マシカ殿。驚いた。」

少女（ほがらかに笑って）「なにをそんなに考えていらしたの、おかしいミヤセルさま。何度も呼んでいますのに、まるで御自分のお名前ではないかのように平気な顔をなさって。」

必要以上にぎくりとした様子の若者。少女の方へ行こうとすると動物たちがぱっと警戒して、逃げかける。慌てて立ち上がる少女。

少女「ああみんな。心配はいらないわ。この人はあたしのお友達よ！」

再びおちつく動物たち。虹色がかった純白の鳥が一羽、差し出された細い腕にとまる。

若者（見とれて）「不思議な人だ。あなたは...！」

少女「...そちらこそ、」

大樹の下、鳥たち獣たちに囲まれながら向かいあいに腰をおろしているふたり。

少女のテはなにげなくあたりにエサのつぶをまいてやりながら。若者はしばらく逃げられたり爪

をたてられたりしてから、ようやく少女のお気に入りの小さな獣を抱き上げるのに成功する。

若者「そう。本当にあなたは妹に似ているんだ。マシカ殿。どこがというわけではなく、髪も眼の色も違っているのだが...全体の背格好とか、最初に見た時の印象なんかがね。雰囲気と同じなんだな。動物たちに不思議なほどなつかれるあたり...妹にもいろいろと変わった事が出来たよ。母方の...妖精族エルフエリの血筋のせいだと思うんだけどね。」

少女「エルフエリの？ まあ！」

若者「うん、まあ...少しだけね。」

少女のエサをまく手が停まり、ふうっと大樹の幹にもたれかかる。

少女「それで判りましたわ。どうしてあたしがあなたを...初めて会った時、懐かしいように感じたのかが。」

遠くを視るような瞳。懐かしむようにかすかに震える声。

少女「もう何年も昔のことになりますわ。あたしはまだ小さくて...亡くなった前のおばさまの後をついで、村の薬師になったばかりの頃でした。ある日...」

若者「そんなに小さいうちから？」

少女「ええ。あたしは特別だから...」

暗転。

少女の回想風景。夜の森。満月。

少女「今おもえばあれは、都で戦が始まったばかりの、すぐ後の出来事だったのですわ。そんな田舎では、まだ何も伝わって来なくて、あたしはまだ、世界は平和で幸せなのだと信じていました。

それが、ある日の晩、水浴びに行った沼のかたわらで、ひどい怪我をして倒れているエルフエリの戦士に出会ったのです。本当に、ひどい、深い傷でした。生きていられたのがまほど不思議なくらい。あたしは必死で看病をして...ひと月の後、おそろしい高熱もひいて、あの方はようやく命をとりとめられました。

丈高い妖精族エルフエリの、なかでもとりわけ高貴なお生まれで...信じられないくらい美しい銀

色の髪をしておいででしたわ。城が落ちた時の火事で、焼けちぢれてしまっていたけれど…。あの方は都での戦の知らせを持って、道を急いでおられたお使いだったのですわ。このあたりの山々を飛び越えて、世界の東の国々へ急を知らせるための。あたしがお止めするのも聞かれずに、未だ傷の治りきらない御身体で、旅立って行かれましたわ。あたしにこれを残して…」

無意識に白い指が胸にかけた袋をまさぐっている。愛しむように。

若者「なに？」

少女「宝玉 "ルマルウンのかけら"。あたしなどを命の恩人だとおっしゃって、あたしには常ならぬ運命（さだめ）の星があるから、守護符がわりに肌身はなさず持つようにと…」

若者（呆然として）「女神ルマルウンのかけら！？伝説の、~~エルフエリの秘宝じゃないか！~~」

少女（未だ夢視心地）「ご存知なのですか？ とても貴重な…あまりにも貴重な宝ゆえに、人知られず代々伝えられてきた品なのだということですわ。なんでも、"12番目の哀しみの女神"ルマルウンの最後の祈りがこめられていて、それを持つ者の真実ほんとうの、たったひとつの願いをだけ、なんでも叶えてくれるという…」

袋から手の平の上へころがり出す宝玉。陽光を吸いにとって不思議な光を放つ。それをぼんやりと見つめていた少女、急にはっとなって、うろたえて頬に手を当てる。

少女「いやだ。あたしったら、秘密なのに。こんな話、今まで誰にだって、したことはなかったのに…！」

頬に血がのぼる。慌てて宝玉を袋に押しこめて、ぱっと走り出して行ってしまふ。

驚いて飛びたつ鳥たち、獣たち。

2016年4月22日 リステラス星圏史略 （創作）

一面の花畑。高原の晩春。

（B.G.M. "恋人たちの泉" by ホリア・クリシャン）

追いつ追われつどこまでも走りぬけて行くふたり。花々の上を吹きわたって行く風。置いて行かれた薬草かご。2人の後をはずむような足どりで小さな獣が追っている。2人の笑顔。上気した頬。

~~カットバック（？）みたいな感じであいだに2人のいろんな情景が入る。糸をつむぐ少女と窓から話しかけている若者とか、子供たちと一緒に踊っているふたり、など。~~

高原を走りぬけて一本の白樺のそばにたどりつく。笑いながら息をきらせて幹にもたれかかる少女。追いつく若者。少女が振り向いて、つと視線が合う。

どちらからともなく寄り添い、抱き合う2人。キスシーン。

つがいで遊んでいた小さな獣がキャッと鳴いて目をおおう仕草。もう一匹はしっぽを膨らませてアテられたように走って逃げる。

夕焼けの最初の光のあかね色。

~~細く輝き始める新月。~~

木陰で寄り添って座っている2人。ふちをとりまいている黒い円が縮まって、水鏡のかたちになる。のぞきこんでいた鬼王、不機嫌そうに顔をあげて一言。

鬼王「...虫がついた...。」ぼそっ

従者「は？ なんかおせられましたか將軍閣下（しょーぐんかっか）！」

鬼王、鼻をしかめて黒いマントをひるがえし、せいぜい威厳をつけて退場。

※順移動？

『宝玉物語』（シナリオ）第一稿 5 （専門学校～派遣ワープロオペレーター時代）

2016年5月5日 リステラス星圏史略 （創作）

夜鳥の声。少女の家のなか。炉の前に腰をかけて髪をくしけずっている少女。物想いにしずんでふと手がとまる。越まで上ってきて心配そうに鼻を鳴らす小さな獣。炎が明るく昏く踊っている。櫛を置き、両手で獣をすくいあげる少女。

少女「今日ね、ねえボナン、聞いてくれる？ あのひとがあまり幸せそうに妹さまのことを話すものだから、あたし言ってさしあげたわ。御自慢の妹君でしたのね...って。

そうしたらあの人、とても得意そうにそりゃあ、って言いかけて、そりゃあ、マーライシャは...って。それから、はっとしたように慌てて口をつぐまれたけど...。

ねえ？ どうしてミヤセル様の妹がマーライシャなんていう御名前なのかしらね？ 兄上の名前がミヤセルなら、妹の名前はミヤーナとか、ミオルンとか... それが普通よね。

前にも、あの人、妖精族の血をひいてるようなことを言って...

エルフエリと人間が結婚するなんてこと、皇族でもない限り、滅多にあるはずもないのにね。

無用心すぎるわ...あの人、滅びた皇さまの都、ルア・マルラインから来た...

妹様、行方不明の皇女殿下と、同じ御名前ですのね... ミヤセル...」

獣をはなし、膝に顔を埋める。獣、不安そうにぐるぐる輪をかき、やがて何かに気づいたように頭をあげ、警告の声をあげて身構える。

ふっと炉の明かりが暗くなる。バタンと開く扉。

少女、顔をあげる。

鬼王が立っている。

立ち上がり、壁に向かってあとじさる少女。

鬼王「言っておいたはずだな。おまえは、わしの妃になるのだと、な。」

少女、壁にかけてある山刀を手に取り、ぱっと窓から飛び出す。

明るい家をあとに夜の森めがけて走り出す少女。

黒い影か煙のようなものがひゅうっと前方に現れ、みるみるうちに鬼王の姿になる。

配下の鬼どもも現れ、取り囲まれた少女、必死に逃げ場を探す。

一步踏み出す鬼王。

少女「...い、いや。いやよ！ あたしは、ミヤセルが...！」

鬼王「村人はもちろんn、その若造の命も、惜しくはないと見えるな？」

少女、はっとして立ち尽くす。

少女「彼に少しでも手出ししたら、承知しないわ！」

鬼王「ならば、来るがよい。」

ぱっと画面を覆う黒マント。暗転。

遠ざかっていく少女の悲鳴。

少女「ミヤセル！ミヤセル〜っ！」

川岸でふっと顔をあげる若者。はるかな高みを、細い銀色の月の輝きを隠して黒い雲が横切って行く。

『宝玉物語』（シナリオ）第一稿 6 （専門学校～派遣ワープロオペレーター時代）

2016年5月5日 リステラス星圏史略（創作）

（※こっから後のシーン、音やセリフをなるべく入れないでやりたい）

どろどろとした暗黒。ぴしゃぴしゃとはねる水音。薄気味の悪い沼地。

若者が半ば這うような姿勢で行軍を続けている。

前方の水中からわいて出る蛇のような触手。

剣を抜く若者。断ち切られて逃げる触手。

岩場をよじ登って行く若者。崩れおちる岩塊。登り切ると前方にさらに高い崖というか、岩山があって、その中腹に岩をくりぬいた形で鬼王の城がある。むきだしの穴というだけの窓々や戸口から漏れ出ている不気味な灯明かり。

しゃっと剣を抜いて口にくわえる若者。

濡れた岩肌の上に松明の灯が映じて揺れている。奇妙な楽の音。

洞窟のような広間での婚礼。大きなかがり火が焚かれ鬼たちが踊っている。

やたらとならべられた食物。

王座でにへらにへらしている鬼王。

隣に腰かけさせられ、椅子の肘をきつく握りしめてあらぬ方を向いている少女。

膝の上に斧が横たえられてある。

はっとした表情で背すじを伸ばす少女。叫ぶように口を開きかける。

暗い通廊への出入り口のひとつに若者が立っている。抜き身の剣にはすでにいくらかの血がついている。歩み入ってくる若者。

立ちあがる鬼王。わらわらと若者に襲いかかっていく鬼ども。立ちすくむ少女。

戦闘シーン開始。暗転。

剣を落とし、壁にもたれかかるように倒れている若者。ざっくり切れた肩口からおびただしい血。

周囲にるいるいと転がっている鬼どもの死体。

にたりと笑い、広間を横切って近づいてくる鬼王。

少女は2人の鬼に両脇から押さえられていて、必死にもがくのだが逃げられない。

もがいたはずみに胸の袋のひもが切れ、床に落ちてころころ転がって行く宝玉。昏い洞窟のなかにあって不思議なほど透明な白光をはなつ。

宝玉の霊光を恐れてすくむ鬼たち。少女を掴んでいた腕をはなし、眼を覆う。

隙をついて鬼に体当たりし、駆けだして宝玉を手にする少女。

背後での動きに気づかず、とどめの剣を振りあげようとする鬼王。ぐったりと目をとじ横たわっている若者。

宝玉を高くさしあげる少女。

少女「女神ルマルウンよ、護らせたまえ！」

振り向く鬼王。輝きを増した宝玉に目を射られ、苦悶する。

画面いっぱい白光。宝玉をさしあげたまま崩おれていく少女と、その周囲でスローモーションのように瓦解していく岩山。岩塊にうたれ、潰されて消える鬼王。

全ての崩壊（タナトス）。

（あたしは戦闘シーンは好きくない！）

2016年5月5日 [リステラス星圏史略](#) （創作）

ピチヨンと滴り落ちる水滴。

精一杯の力で少女が岩を押し分けると、向こうに壁に守られて岩から免れた空間があり、若者が倒れている。

天井のすきまから、明けてきた朝の空が見え、光がこぼれている。

少女の手が若者の額に乱れ落ちた髪をなであげる。

少女「ミヤセルさま...」

若者が弱弱しく目をひらく。はっきりと死相が出ている。少女、泣く。

少女「待っていて下さい。今...今、手当してさしあげますわ。すぐに... よくなります。水を探して...」

蒼ざめて立ち上がろうとする少女の手を若者がつかまえる。

若者「行かないで。無駄だ... わたしは、もう救からない。」

少女「馬鹿なことをおっしゃらないで。すぐによくなります！」

若者「戦場で、略奪された街で、なすすべもなく死んで行く者たちの姿をわたしは大勢見てきたよ。だから...」

少女「あたしは薬師ですわ！」

若者「いいからここにいるんだ。話を...最期の...聞いておいてほしい。」

少女「ミヤセルさま...」

少女の涙が若者の頬にしたたり落ちる。

若者「泣かないで... わたしは謝らなければならないのだから。きみに... そして、全ての民に。」

少女「ミヤ...」

若者「ミヤセルではない。わたしの、本当の名前はマリシアル。行方不明の、ルア・マルラインの皇子だ...」

若者「マシカ、驚かないのだね」

少女「知って... いましたもの、あたし。素性を隠されるおつもりだったのなら、あなたはずいぶん無用心過ぎましたわ。」

若者「本当だな...（笑う）」

若者「不意打ちにあって城の陥ちたあの日、父王も母王も大臣たちも、皆、目の前で殺された。逃げのびる途中で妹とも離れ離れになり... 誰もがあの子も死んだのだろうと言ったが... わたしは、それだけは信じられなかった。わたしはマーライシャを愛していたから... 兄としての想いよりも、もっと強く。

そうしてわたしは皆の反対も止めるのも聞かずに、あてのない旅に出た。己にかまけて義務を、民人を放り出して来たのだ... 皇としてあるまじき振る舞いだ。

とうとう、国を守り奪り返すための戦いに... 加わることもなく...」

少女「ミヤセルさま、ミヤセルさま！」（首を振る）

若者「謝らねばね、マシカ。わたしはいつでも、あなたを通して、妹を視ていた。...

いつの日か、あの子が、国の平和を取り返し、わたしの消息を訊ねてこの村へやって来る時もあるだろう。

そうしたら、マシカ、伝えてほしい。

わたしの愚かなふるまいを...

いつか、マーライシャに会ったら...」

（静かに目を閉じる）

若者「...マー...ラ...イ...シャ...」

少女「ミヤ... ミヤセルさま... 皇子...!!」

(呆然として涙。)

崩れた岩山を背景に真新しい墓がある。

その前に立ち尽くしている少女。

地面から若者の弓を拾いあげる。

少女（一礼して）「御形見に、いただいていきますわ。この弓。...どうぞ...安らかに眠って下さい。...あたしの...」

振り向いて、どこまでも緩やかに起伏して続く草原の地を歩きだす。片手に弓。片手にむきだしになった宝玉をぼんやりと携えて。

どこまでも、どこまでも...

BGM、静かにかぶせて、作画とか声とかの字幕を出す。

静かに遠ざかっていく少女。

完全に見えなくなったところで一旦【fin.】マーク。

溶暗。

ごとりと音がして暗闇の中から、岩を押しつけて鬼王の手が伸びる...

(で、完全に「おしまい。」)

(うわ～あああっ！ 根暗いッッ！！)

『宝玉物語』

(アニメ化！用「脚本」第2稿)

『宝玉物語』（シナリオ第2稿）（若者の夢の情景）

『宝玉物語』（シナリオ第2稿）（若者の夢の情景）

2016年5月19日 [リステラス星圏史略](#)（創作）[コメント\(1\)](#)

『宝玉物語』（シナリオ第2稿）

（若者の夢の情景）

碧色の豊かな巻き毛をひるがえして女の子が城の庭を走り回っている。

さんさんと降りそそぐ陽光。笑い声。

女の子は少年（幼い頃の若者）を無邪気に追いかけている。

女の子「お兄さま。お兄さま！ お待ちになってったら、ねえ！」

笑って逃げる若者へめがけて信じられないほど高く空へ翔びあがる女の子。

受けとめようとして伸ばされた少年の腕のなかへ、天女のようにふわりと舞いこんで、抱きとめられる。幸福な兄妹。

それを遠くから見て笑っている皇と皇妃。

数人の女官たち。

窓辺の部屋で女官たちにかしづかれて盛装の仕度をしているすこし成長した女の子。大人びて華やかに、笑って振り返りかけ、凍りつき、恐怖し、やがて悲鳴をあげる。

背景だけ暗黒にかわり、メラメラと燃え上がり、画面を覆っていく炎のイメージ。

（※ここから始ってもよい。）

火の手に包まれた城の光景。

押し寄せる鬼ども。

逃げ惑う2人。

ころがっている死体。

少年「逃げるんだ！ 生きて！ 遠くへ...！」

女の子「はい！」

兄妹は剣をとって逃げのびるべく闘っている。乱闘のさなか、つないだ手が離れ、呼びあいながら次第に遠ざけられてゆく2人。

赤黒い炎の城を背景に、溶暗。

消えて行く声。

女の子「お兄さま！ お兄さま！ お兄さま〜っ！」

声と同時に暗転してあられてくる若者（成長した少年）の寝顔。

苦しげにうなされて眉をしかめる。

若者「うわあああああっ！」

がバツと飛び起きる若者。

朝もやのたちこめる森の光景。

焚き火からひとすじ煙がたちのぼっている。

枝につながれた馬が気遣わしげに鼻を鳴らして地面を搔く。

若者「...夢か...」

ため息をつき、手のひらに顔をうずめる。

『宝玉物語』（シナリオ第2稿）（森の小径）

『宝玉物語』（シナリオ第2稿）（森の小径）

2016年5月19日 リステラス星圏史略 （創作）

森の小径。木の間ごしの日差し。

くねった曲がり角の向こうで2人の人間が言い争っている。

真っ黒いぼうっとした影のような丈の高い存在と、

茂みに遮られた見える白いほっそりした脚。

白い脚の下で、小さな獣が警告するように牙をむいて、黒い影に唸っている。

少女「何度言われようとも、嫌なものは嫌です！」

鬼王「わたしの忍耐もそう長くは続かぬぞ。この話をどうしても断るといふのなら、よかろう、この"道の果ての村"の者どもも、他の村と同様、一人ずつ...」

少女「...卑怯者...っ！」

鬼王「判っておるだろうな。次の冬、年越しの祭までの間だけは、婚礼は待ってやろう。だが、自分がこのわしの妃となるべき身なのだということだけは、十分にわきまえておけよ。

...人が来たようだ。わしはこれで去るぞ。」

黒い影、煙となって消える。

怒りを抑えて震えている、白い服、黄色い髪の子の後ろ姿。

足もとに草摘み籠が転がっている。

眼下にひらけている村と谷。青い空のもと、背後から緩やかに蹄の音が近づいて来る。

心配そうに鳴く獣。

下の道から角を折れて、疲れた旅人姿の若者が馬の乗り上がって来る。

若者「もし、その娘さん。すこしものをお尋ねしたいのだが、この村は何という...」

風に髪をなぶらせて鮮やかに振り返る少女。

意志の強い、幼いけれども見事に整った表情。

一瞬、妹（女の子）と面影が重なり、若者は息を呑む。

しばらくの沈黙。少女、口をひらく。

少女「ようこそ、旅の御方。聞かせてさしあげましょう。ここは辺境。あなたが歩いて来られた街道の行きあたり。ここより先に人の歩ける道はなく、そうして、この村は昔からこう呼ばれてきましたわ。"道の果ての村"と...。」

暗示的に伸ばされる白い腕。その上を獣が駆け抜ける。

背景、パンして高く聳える山なみを映し出す。

雪の峰に反射する陽光が一瞬煌めいて、宝玉のイメージに変わる。

宝玉が転がって満点の星月夜に。

水面月が揺らめいて場面は"星ヶ沼"と楡の樹の遠景になる。

白い姿の少女が小さく画面を走り抜ける。

『宝玉物語』のタイトル字幕、うかびあがる...

暗転。

ニワトリの関の声。朝の風景。

村人たちは早々に起きだして、三々五々、狩の仕度をしたり畑に出たりしている。
長の家の一室の窓がぱたんと開いて、伸びをするように若者が姿をあらわす。

中庭よりの所で井戸の順を待っている緑や茶色の山装束の女達の間から、白い服の少女、降りむいて若者の方へ歩み寄る。

肩に留まっている獣。

少女「お早うございます。よくお寝みになられましたか？」

若者「お早う。あなたにもらった薬酒のおかげだよ。久しぶりに夢も見なかった。」

少女「薬草を扱うのがあたしの仕事なのですわ。」（薬草カゴを示して見せる）。

若者「山へ入るのかい？ 近頃は鬼どもがうろつくので危ないと、ゆうべ聞いたけれども」

少女「この川の（身振り以示して）こちら側なら普通は大丈夫ですわ。水がとても冷たくて、めったに渡れないんです。それに... どちらにせよ、あたしには無闇と手出しをしないので。」

ふっと騒るような瞳。若者は魅入られたようにその顔かたちを見つめている。

若者「似ている... 本当に...」

少女「え？」

若者「あ、いや、なんでも...」

少女（軽く微笑んで）「よろしければ御一緒にいらっしゃいませんか？ あたし、このあたりを案内してさしあげられると思いますわ、旅の御方」

若者「ミヤセルだ。ミルドーとメレアの息子、ミヤセル・アテナムン。」

少女（一礼して）「どうぞ、ミヤセルさま。...あたしはマシカ。星の娘のマシカって呼ばれていますわ。親はいません。この村のみんなが育ててくれました。」

村の道を連れ立って歩いて行く2人。

『宝玉物語』

(アニメ化！用「脚本」第3稿)

2016年5月5日 リステラス星圏史略 （創作）

◎シーンNo.1

森の小径。木の間ごしの日差し。くねった曲がり角の向こうで2人の人間が言い争っている。真っ黒いぼうっとした影のような存在と、茂みに遮られて見える白いほっそりした脚。白い脚の下で、小さな獣が警告するように牙を剥いて、黒い影に唸っている。

少女「何度言われようと無駄です！大体、よくも恥を知らずにそんな御話を持ち掛けられたものですわね！」

鬼王「わたしは忍耐強い方だが、それでもそう長くは続かぬぞ。おまえが心良く承知するならばよし。したが本気で否と言うならばだな。おまえの村の連中を、ひとりずつ…」

少女「…卑怯者…っ!!」

鬼王「判っておるだろうな。次の冬の、年越しの祭までの間だけは、婚礼は待ってやろう。だが、自分がこの鬼王の妃となるべき身なのだということだけは、十分にわきまえておけよ。…人が来たようだ。わしはこれで去るぞ。」

黒い影、煙となって消える。

怒りを抑えて震えている、白い服、黄色い髪の少女の後ろ姿。足もとに草つみ籠が転がっている。

眼下に開けている村と谷。川の流れ。

青い空のもと、背後から緩やかに蹄の音が近づいて来る。

心配そうに鼻を鳴らす獣。

下の道から角を折れて、疲れた旅人姿の若者が馬に乗り登って来る。

若者「もし、そこの娘さん、少しものをお尋ねしたいのだが... この村は何という...」

風に髪をなびかせて鮮やかに振り返る少女。

一瞬、妹と面影が重なり、若者は息をのむ。

しばらくの沈黙。少女、口を開く。

少女（詠うように）「ようこそ、旅の御方。聞かせてさしあげましょう。ここは辺境、あなたが歩いて来られた街道の行きあたり。ここより先に人の辿れる道はなく、そうして、昔からこの村はこう呼びならわされていますわ。"道の果ての村"と...」

暗示的に伸ばされる白い腕。その上を獣が駆けぬける。

背景、パンして高く聳える山並みを映し出す。

雪の峰に反射する陽光が一瞬きらめいて、宝玉のイメージが変わる。

宝玉が転がって満点の星月夜に。水面月がゆらめいて場面は"星ヶ沼"と楡の樹の遠景になる。

白い姿の少女が小さく画面を走り抜ける。

『宝玉物語』のタイトル字幕、浮かびあがる...。

※「このセリフ第一稿のほうがいい」というハルアキ君の書き込みあり。

2016年5月5日 リステラス星圏史略 （創作）

◎シーンNo.2

暗転。ニワトリの関の声。朝の風景。

村人たちは早々に起きだして、三々五々、狩の仕度をしたり畑に出たりしている。

周囲のものより一回り大きな造りの長の家の、中庭風の場所で、井戸の順番を待っている女たち。

背後で一室の窓がぱたんと開いて、伸びをするように若者が姿を現す。

井戸の傍らの緑や茶色の地味な山装束の女たちの間から、ひとり白い服を着ている少女、振り向いて若者の方へ歩みよって来る。

肩に留まっている獣。

少女「お早うございます。よくお休みになられましたか？」

若者「お早う。あなたに貰った薬酒のおかげだよ。」

少女（はにかんで）

「薬草を扱うのがあたしの仕事なんです。薬司（くすりのつかさ）ですもの。」

（薬草カゴを示して見せる）

若者「腕がいいんだね。...山へ入るのかい？ 近頃ではこの辺りにまで鬼が出て、危ないと聞いたけれど。」

少女「この川の（身振りで示して）こちら側なら、普通は大丈夫ですわ。伊豆が冷たくて鬼たちは渡れませんの。それに... どちらにせよ、あたしには無闇と手出しはしないので。」

ふっと翳る瞳。若者は魅入られたようにその顔かたちを見つめている。

戸惑って頬を染める少女。

若者「...あ、いや、すまない。あなたがあまり、わたしの妹に似ているもので、つい...」

少女「まあ、妹さまに？」（ふっと微笑して）「よろしければ御一緒にいらっしゃいませんか？
あたし、この辺りを案内してさしあげられると思いますわ、旅の御方。」

若者「ミヤセルだ。ミルドーとメレアの息子、ミヤセル・アテナムン。」

少女（一礼して）「どうぞ、ミヤセルさま。...あたしはマシカ。星の娘のマシカって呼ばれています。捨て児だったので親はいません。この村のみんなが育ててくれました。」

村の道を連れだって歩いて行くふたり。

『宝玉物語』（シナリオ第3稿） 3 （派遣時代？）

2016年5月5日 リストラス星圏史略（創作）

◎シーンNo.3

晩春を迎えた山岳地帯の森。花々は咲き競い、草葉の先から朝つゆの最後のしずくが落ちて行く。
。

杉道を踏んで歩いて行くふたりの姿。

鶏の巢の親とヒナ。駆けていく兎や仔鹿。

（そういったモチーフを背景に画面とは直接かかわりなく2人の会話が続く。）

少女「それではミヤセルさまはその戦で生き別れになった妹さまを探して？ 旅を続けていらっしゃいますの。」

若者「そう... もう何年にもなるかな。わたし達はむかしルア・マルラインに住んでいたんだ...」

少女「ルア・マルライン！ ...では本当のことだったのですね。都が鬼どもの一軍に襲われて、滅ぼされてしまったという噂は...」

若者「ああ。」

少女「...信じたくはなかった...。」（手のひらに顔を埋める。）「王陛下も、王妃様もお亡くなりだというのなら、一体誰がこれから先、鬼どもからあたし達を守って下さいますの？」

若者「ひどい戦だったよ、マシカ殿。いや、戦なんてものじゃなかった。一方的な虐殺。皆殺し...不意をつかれて、ほとんどの者はやられた。わたしも自分一人が逃げのびるのに精いっぱい。」

少女「...それでは、妹さまは...」

若者「生きては、いるはずなのだが...」

道の途中、片側が崖になって視界が開ける。広々とした景色。えんえんと連なる山なみ。木洩れ陽がふたりの顔を踊る。

若者は世界を見渡して、

若者「...いい空だ...」

なにも言えずにうつむく少女。

少女「せめて王子殿下だけでも、噂どおり、本当に生きのびていて下されば...」

若者が何故かふっとたじろいのような、苦しむような表情をする。

それに気づいて怪訝そうに口ごもる少女。

少女「...あ、そういえば、これからどうなさいますの、ミヤセルさまは？　ここは"道の果ての村"ですわ...」

若者「そうだね。また山を下って別の街道を辿ってみるか、それとも...。

どちらにせよ、しばらくの間はこの美しい村で体を休めることにするよ。」

ふっと2人の視線が合い、やがてどちらともなくあたりに目を移す。

◎シーンNo.4 （星ヶ沼）

野辺をぼんやり歩いている若者。少女のしきりに呼びかけている声がする。

少女「ミヤセル。ミヤセルさま！ ミヤセルったら... やっほーっ！」

びくっとして振り向く若者。すこし離れた樹々の下に獣たち鳥たちに囲まれて王女のように立ち止まっている少女がいる。若者、驚いたように弱弱しく微笑む。

若者「あ、ああ。マシカ殿。驚いた。」

少女（ほがらかに）「おかしいなミヤセルさま。何度も呼んでいますのに、まるで御自分のお名前ではないみたいなの、平気な顔をなさって。」

必要以上にぎくりとした様子の若者。少女のほうへ近づこうとする。
動物たちがぱっと警戒して逃げかける。慌ててふわりと腕をさしのべる少女。

少女「ああみんな、心配はいらないわ。この人はあたしのお友だちよ！」

再び落ち着く動物たち。虹色がかった純白の鳥が一羽、さしだされた細い腕にとまる。

若者（見とれて）「不思議な人だ、あなたは...！」

少し寂しげににっこり微笑んで誘うように無言で歩き出す少女。

深い森の中。一角がひらけて、星ヶ沼と楡の樹。森から枝をかき分けて姿をあらわした若者、かたわらの少女を振り返る。

若者「ここは...？」

少女「星ヶ沼。...思い出がある場所なんです。」

若者「思い出？」

少女「ええ。それに、そもそもあたしが捨てられていた場所も、ここだと言うし。」

若者、黙って少女の動きを見守っている。

少女は歩いて行って太い楡の樹の幹にテをかけ、ぼんやり立っている。
沼の向こう岸で水を飲み終えて躍るように駆け出して行く青色のユニコーン。
少女、幹にもたれて座り込む。

寄って来て斜めに向かい合うような形で腰をおろす若者。
集まってくる獣たち鳥たち。

腰の袋から何気なく餌を撒き始める少女。
ついでに小鳥たち。若者、しばらく逃げられたり爪を立てられたりしてから、ようやく少女のお気に入りの小さな獣を抱きあげるのに成功する。

ぼんやりと彼方を見やりながら口を開く少女。

少女「もう...何年も前のことになりますわ。あたしはまだ小さくて...」

暗転。少女の回想風景。

夜の森。満月。

少女「いま思えばあれは、都で戦が始まったばかりの、すぐ後のことだったんですわ。
ある日の晩、この沼に水浴びに来て、ひどい怪我をして倒れている妖精族エルフエリの戦士に
出会ったのです。
本当に、ひどい、深い傷でした。
生きてこんな辺境まで空を飛んで来られたのがそれこそ不思議なくらい...」

あたしは必死で看病をしてさしあげて、ひと月の後、おそろしい高熱もひいて、ようやくあの肩
は命をとりとめられました。
丈高い妖精族エルフエリの、なかでもとりわけ高貴なお生まれで...
信じられないくらい美しい銀色の髪をしておいででしたわ。

都が落ちた時の火事で、焼け縮れてしまっていましたけれど...

あの方は都での戦の知らせを持って道を急いでおられたお使いだったのですわ。
鬼どもの一族が攻め入って来たことを、世界の東の国々に知らせ、援軍を出させるための。
お止めするのも聞かれずに、未だ傷の治りきらないお体で旅立って行かれましたわ。
あたしにこれを残して...」

無意識に少女の白い指が胸にかけた袋をまさぐっている。愛おしむように。

若者「なに？」

少女「宝玉 "ルマルウンのかけら"。あたしなどを命の恩人だとおっしゃって、あたしには常ならぬ運命（さだめ）の星が見えるから、守護符がわりに肌身はなさず持つように、と。」

若者（呆然として）「"ルマルウンのかけら"?! あれは王妃の...!」（黙る）

少女（未だ夢見心地）「ご存知なのですか？ とても貴重な、あまりにも貴重な宝ゆえに人知れず代々伝えられて来た品なのだと思いますわ。なんでも神々の手ずから造られた魔法の品で、それを持つ者の一生に一度の真実たったひとつの願いをだけ、叶えてくれるという...」

袋から掌へころがりだす宝玉。陽光を吸いにとって不思議な光を放つ。

『宝玉物語』（シナリオ第3稿） 5 （派遣時代？）

2016年5月6日 リステラス星圏史略 （創作）

◎シーンNo.5

村の道で子供たちと踊っている少女と、傍らの石垣でそれを眺めている若者。

◎シーンNo.6

村人たちが木を伐るのを手伝っている若者と、そこへ弁当を届けに来る少女。

（※シーンNo.5・6は、No.4の前へ持って行ってもよい。）

◎シーンNo.7

一面の花畑。高原の晩春。

ユニコーンの首筋に手を置いている少女。遠い視線。

夕暮れの風が草原の上を吹き渡り、足もとに置き忘れられた草摘み籠から葉の2～3片をさらい出していく。

ふと、歩き出し去っていくユニコーン。
風に髪をさらわれながら振り返る少女。

若者が立っている。

キスシーン。夕暮れの情景。

◎シーンNo.8

木陰で寄り添って座っているふたり。画面のふちをとりまいている黒い円が縮まって、水鏡の形になる。

覗きこんでいた鬼王、不機嫌そうに顔をあげて一言。

鬼王「...虫がついた...。」

顔をしかめて黒いマントをひるがえし、無言のまま部屋を歩み出て行く。慌てたようにわらわらとついて行く手下の鬼たち。

『宝玉物語』（シナリオ第3稿） 6 （派遣時代？）

2016年5月6日 リステラス星圏史略 （創作）

◎シーンNo.9

夜鳥の声。少女の家のなか。

炉の前に腰かけて髪をくしけずっている少女。

物想いに沈んで、ゆるやかに手が止まる。

膝まで昇って来て心配そうに鼻を鳴らす小さな獣。

炎が明るく昏く踊っている。

櫛を置き、両手で獣をすくいあげる少女。

少女「ねえボナン。聞いてくれる？ あの人の妹さまの御名前ね、マーライシャっていうのですって。滅多にありはしない名前なのに、亡くなられたはずの王女さまと同じなのは、何故なのかしらね。

...あの人、滅ぼされた王さまの都、ルア・マルラインから来た...」

獣を放し、膝に顔を埋める。

獣、不安そうにぐるぐる輪をかき、やがて何かに気づいたように頭をあげ、警告の声をあげて身構える。

ふっと炉の明かりが暗くなる。

バタンと開く扉。少女、顔をあげる。鬼王が立っている。

立ち上がり、壁にむかって後じさる少女。

鬼王「言っておいたはずだな。おまえは、わしの妃になるのだとな。」

少女、ぱっと窓から飛び出す。

明るい家をあとに夜の森めがけて走りだす少女。

黒い影か煙のようなものがひゅうっと前方に現れ、みるみるうちに鬼王の姿になる。

配下の鬼どもも現れ、とり囲まれた少女、必死に逃げ場を探す。

一歩踏み出す鬼王。

少女「...い、いや！ いやよ！ ...あたしは、ミヤセルが...！」

ぱっと画面を覆う鬼王の黒マント。暗転。

遠ざかっていく少女の悲鳴。

少女「ミヤセル！ ミヤセル〜っ！」

がりがりと必死で若者の部屋の窓枠を引っ掻く小さな獣。

ぱたんと若者が戸板を上げ、身を乗り出し、空を見上げる。

若者「マシカ！」

はるかな高みを、満月の輝きを隠して不吉な黒雲のように鬼王たちが横切って行く。

あちこちで窓や戸が開き、顔を出す村人たち。

『宝玉物語』（シナリオ第3稿） 7 （派遣時代？）

2016年5月6日 リステラス星圏史略（創作）

◎シーンNo. 1 0

どろどろとした暗黒。
ぴしゃぴしゃと跳ねる水音。
薄気味の悪い沼地。

若者がなかば這うような姿勢で行軍を続けている。

前方の水中から湧いて出る蛇のような触手。
剣を抜く若者。断ち切られて逃げる触手。

岩場をよじ登っていく若者。崩れ落ちる岩塊。
昇りきると前方に更に高い崖というか岩山があって、その中腹に、山腹をくりぬいた形で鬼王の城がある。
剥きだしの穴、というだけの窓々や戸口から漏れ出ている不気味な灯明かり。

しゃっと剣を抜いて口にくわえる若者。

◎シーンNo. 1 1

濡れた岩肌の上に松明のあかりが映じて揺れている。
奇妙な楽の音。

洞窟のような広間での婚礼。
大きな篝火が焚かれ鬼たちが踊っている。
やたらと並べられている食物。

玉座でにへらにへらしている鬼王。
隣に腰かけさせられ、椅子の肘をきつく握りしめて、あらぬ方向を向いている少女。
膝の上に儀式用の斧が横たえられてある。

はっとした表情で背すじを伸ばす少女。
叫ぶように口を開きかける。

暗い通廊への出入り口のひとつに若者が立っている。
抜き身の剣にはすでにいくらかの血がついている。
静かに歩み入ってくる若者。

立ち上がる鬼王。

わらわらと若者に襲いかかって行く鬼ども。
立ちすくむ少女。

戦闘シーン開始。

暗転。

肩の傷を押さえ、荒い息をつきながら、かろうじて立っている若者。
だらだらと赤い血が流れ落ちる。
若者の剣は刃が半ばから折れている。

周囲に累々と転がっている鬼どもの死体。

にたりと笑い、広間を横切ってくる鬼王。

少女は二人の鬼に両脇から押さえられていて、必死にもがくのだが、逃げられない。

若者、鬼王に斬りつける。二三合打ち合う。押され気味の鬼王。

手下の鬼どもが少女に短刀を突きつける。少女がもがくはずみに胸の袋のひもが切れ、宝玉が落ちて転がる。気づかない少女。

ハッと少女のほうに気をとられる若者。

隙につけこんで切りかかる鬼王。

鬼王の背中に遮られてよくは見えない角度で、ゆっくりと倒れ込んでいく若者。

悲鳴をあげる少女。それに呼応して白く輝き出す宝玉。

宝玉の霊光を恐れて立ちすくみ、目を覆い苦悶する鬼たち。

画面いっぱい白光。

崩おれていく少女と、その周囲でスローモーションのように瓦解していく岩山。

岩塊に打たれ、潰されて消える鬼王。

全ての崩壊。

2016年5月6日 リステラス星圏史略 （創作）

◎シーンNo.12

ピチヨンと滴り落ちる水滴。

精一杯の力で少女が岩を押し分けると、向こうに壁に遮られて岩から守られた空間があり、若者が倒れている。

天井のすきまから明けてきた朝の空が見え、光がこぼれている。

少女の手が若者に羊の額に乱れ落ちた髪をなであげる。

少女「ミヤセルさま...」

若者が弱弱しく目をあける。はっきりと死相が出ている。

少女、泣く。

少女「待っていて下さい。今... 今、手当てしてさしあげますわ。すぐに... 良くなります。水を探して...」

蒼ざめて立ち上がろうとする少女の手を若者がつかまえる。

若者「行かないで。無駄だ... 私は、もう救からない。」

少女「馬鹿なことをおっしゃらないで！」

若者「いいからここにいるんだ。話を... 最期の。聞いておいて欲しい。」

少女「ミヤセルさま...」

少女の涙が若者の頬に滴り落ちる。

若者「泣かないで... わたしは謝らなければならないのだから。きみに... そして、全ての民に...」

少女「ミヤ...」

若者「ミヤセルではない。私の、本当の名前は、マリシアル。ルア・マルラインの王子だ...」

若者「マシカ、驚かないのだね。」

少女「知って... いましたもの、あたし。」

若者「本当かな...」 (笑う)

突然、若者が咳き込み、口の端から血が流れる。
最期の力で弱弱しく腕をあげる。

若者「いつか天 マーライシャに会ったら...」

微笑むように瞼を閉じ、力を失った腕が落ちる。

少女、呆然として涙。

『宝玉物語』（シナリオ第3稿） 9 （派遣時代？）

2016年5月6日 リステラス星圏史略（創作）

◎シーンNo.12

崩れた岩山を背景に、真新しい墓がある。

その前に立ち尽くしている少女。

地面から若者の弓をとりあげ、じっとたたずむ。

振り向いて、どこまでも緩やかに起伏している草原の地を歩き出す。

片手に弓。片手にむきだしになった宝玉を携えて。

どこまでも、どこまでも...

BGM、静かにかぶせて、作画とか声とかの字幕出す。

遠ざかり、小さくなっていく少女。

完全に草原の彼方に見えなくなったところで、

FIN.マーク小さく出す。

溶暗。

◎シーンNo.13

ごとりと音がして、暗闇の中から、岩を押しつけて鬼王の手が伸びる...

◎シーンNo.14

(No.13の音に驚いたように) 森の中で振り返る、成長した姿の少女。

狩装束で、弓を持っている。

少女が振り向いた先に、二人の少年を従えて、緑の髪をなびかせた王女が立っている。

...そして、完全に、終まい。

『宝玉物語』

(アニメ化！用「脚本」第4稿)

2016年5月12日 リステラス星圏史略 (創作)

『宝玉物語』 (シナリオ第4稿)

◎シーンNo.1

(そのまま)

◎シーンNo.2

暗転。ニワトリの関の声。朝の風景。

村人たちは早々に起きだして、三々五々、狩の仕度をしたり畑に出たりしている。

周囲のものよりひとまわり大きな造りの長の家の中庭風の場所で、井戸の順番を待っている女たち。水を使いながらガヤガヤと話している。

女1「アガヤんとこの赤ン坊がゆうべ風ヶ谷で迷い児にね...」

女2「まあそんなところまで？ 鬼どもにさらわれんで良かったねエ」

女3「ほんとにあの鬼族の奴等ときたら」

女3「おかげで今年は恐ろしくて山菜摘みにもよう行かれない。マシカ、あんたもね、薬草探してもいいけど、見つけれんように十分気をつけ...」

背後で一室の窓がぱたんと開いて、伸びをするように若者が姿を現す。

振り返る女達。

女4「あれ。旅の若い衆がお目覚めのようだよ」

井戸のかたわらの緑や茶色の地味な山装束の女たちの間から、ひとり白っぽい服を着て目をひく少女、すたすたと若者の方へ歩み寄って来る。肩にとまっている獣。

少女「お早うございます。よくお休みになられましたか？」

若者「お早う。あなたにもらった薬酒（くすりざけ）のおかげだよ。とてもよく効いた。」

少女（はにかんで）「あたし、薬草使いなんですもの。それが仕事なんです。」

（薬草カゴを示して見せる。）

若者「山へ入るのかい？ 近頃このあたりじゃ村人の畑近くまで鬼どもがうろつくので、とても危ないとゆうべ聞いたけれど。」

少女（身振りで示して）「川のこっち側なら今のところは大丈夫、雪どけで水かさが増えていますから。それに... どちらにせよ、あたしには無闇と手出しをしないので。」

ふっと翳る瞳。遠い表情。

若者は魅入られたようにその顔かたちを見つめている。

とまどって頬を染める少女。

若者「...あ、いや、すまない。あなたがあまり、わたしの妹と似ているもので、つい...」

少女「まあ、妹さまに？」（ふっと微笑んで）「よければ御一緒に来ませんか？ このあたりを案内してさしあげますわ。旅の御方」

若者「ミヤセルだ。ミルドーとメレアの息子、ミヤセル・アテナムン」

少女（一礼して）「どうぞ、ミヤセルさま。...あたしはマシカ。星の娘のマシカって呼ばれます。捨て児だったので親はいません。この村のみんなが育ててくれたんです」

村の道を連れ立って歩いていく2人。

◎シーンNo.3

晚い春を迎えた山岳地帯の森。

花々は咲き競い、草葉の先から朝つゆの最後のしずくが落ちて行く。

杉道を踏んで歩いて行く2人の姿。

鳥の巣の親と雛。

駆けて行くウサギや仔鹿。

少女「それではその妹さまを探して？」

若者「旅を続けている、というわけかな。もう何年も前に生き別れてしまってね…。乳母やが連れて逃げた所までは、わたしも見届けたんだが。…まあ、きっと、生きてはいる筈さ…」(心持ち自嘲気味に)

少女(眉をよせる)「都で戦が絶えないって事は噂で聞いています。だけど一体どうして人間どうしで争わなければいけないんですの？ 先の大王(おおきみ)さまが亡くなってからっていうもの、鬼や妖怪どもの一族が好き勝手に暴れまわるようになってきて、あたし… ううん。早く新しい大王さまを決めて、鬼どもを治めて頂かないと。人同士でいつまでも争っているのは、今に鬼どもに滅ぼされてしまう。

どうして王太子さまは後を継いで下さら…」

若者が何故かふっとたじろいのような、苦しげな表情をする。

それに気づいて怪訝そうに口ごもる少女。

少女「あ… そういえば、これからどうなさるの、ミヤセルさまは？」

若者(まだ気弱な顔のまま)「そうだね。山を下ってまた別の街道を辿ってみるか、それとも…。」

若者「どちらにせよ、しばらくの間はこの美しい村で体を休めることにするよ」

ふっと2人の視線が合い、やがてどちらともなくあたりに視線をうつす。

◎シーンNo.4

村の道で子供たちと遊んでいる少女と、傍らの石垣でそれを眺めている若者。

◎シーンNo.5

村人たちが木を伐るのを手伝っている若者と、そこへ弁当を届けに来る少女。

◎シーンNo.6

村祭り。

長の家内部と中庭で呑んだり踊ったりしている村人たち。

少女と若者、手を取りあって踊りに加わっているが、やがて疲れて輪を抜け、灯りの届かない外
のあたりまで連れ立ってやって来る。

少女「ふう。喉がカラカラ」

若者「まったくだ」

少女「いい月ねえ！」

少女、木にもたれかかって満月を見上げる。
つと歩み寄る若者。そっと少女の肩に手をかける。

若者「マシカ…」

少女「え、なあに？」

無邪気に見上げる少女。じっと見つめられ、やがて困惑して目を伏せる。

少女「あの... ミヤセルさま、あたし...」

そっと少女を抱き寄せる若者。少女、とまどい、顔をあげる。みつめあう2人。

若者、少女を抱きしめる。

若者の棟に手をあてている少女。

2人の顔、近づく。

少女、震えながら瞳をとじかけ、やがて蒼ざめた表情で体を離す。

若者「マシカ」

少女（激しく首を振る）「ごめんなさい。ごめんなさい、ミヤセルさま。あたしは... だけど... ！」（あえぐ）

少女の頬をつたい落ちる涙。少女、後じさり、ぱっと暗闇のなかへ駆け出して行く。

後を追い、2～3歩走りかけて立ち止る若者。

若者「...マシカ...?!」

背景、家の戸口で、漏れる明かりを遮って立っている村人（長）がいる。

◎シーンNo.7

村はずれの畑地。村長が一人で黙々と鍬を握っている。
向こうの道からやって来て声をかける若者。

若者「村長（むらおさ）！」

村長、鍬を置き、不機嫌そうにゆっくりと振り返る。無言。

若者「マシカを見ませんでしたか？ どこにもいないんだ。」（不安げに）

村長「どこにも？」

若者「ええ。村じゅう探したんだが...」

村長「そんなら、銀の仙人のところじゃろう」

若者「銀の仙人？」

村長「わしらはそう呼んだ。川向うの山におじゃる、妖精人（びと）の騎士さまよ。世を捨てた暮らしをしておいでじゃ」

若者「なんでマシカが...」

村長「あれは薬草使いじゃでの」

言いさして、村長、鍬をとり若者に背をむける。

村長「何年か前、怪我をして倒れておいでじゃった仙人さまを、手当てして救ってさしあげたのがあの娘じゃ。それ以来、仙人さまはここに住みつかれてな。
マシカは時折、御不自由がないかと見に行きよる。

悩みごとなぞも聞いて貰っておるのである。親兄弟のいない娘じゃから…」

若者「ありがとうございます。行ってみます」

短気に歩きだしかける若者。

はっとするほど鋭い口調で村長が呼び止める。

村長「旅の衆！」

驚いて足を止める若者。村長は向こうをむいたまま。

若者「なにか…？」

村長「早くこの村から出て行くことじゃ。あの娘が好きなら、あの娘を連れて。」

若者「どういうことです」

村長の背中を見据える若者。

村長、それ以上応えず、黙然として鍬を振り上げる。

◎シーンNo.8

沼のほとりを少女が跳ねるように歩いている。

木にかこまれた洞窟から不自由な片足で杖をつきつつ現れる仙人。

少女、その前まで行き、軽く膝まづいて礼をとる。

仙人「よく来た。星の娘よ」

少女「エルフエリさま」

仙人「そなたの言いたいことは解っているよ。あの若者と共に、この村を去るが良い」

少女、膝まづいたままうつむき、顔をゆがめる。

少女「村長にも同じことを言われました。でも…」

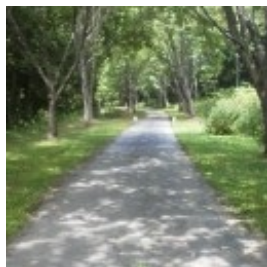
仙人「鬼の王が。…か」

少女「ええ。あたしを育ててくれたのは村のみんなです。」

(未完)

誰夢明日に続く道。2013年8月4日

[誰夢明日に続く道。](#) 2013年8月4日 [リステラス星圏史略](#) (創作)



大地世界の公道、〈白き皇の道〉がちょうどこんな感じ。

[直結。](#) 2013年8月4日 [リステラス星圏史略](#) (創作)



樹紋と縁盤を持ってたら、間違いなくダレムアスに着くな...

[完全に物語内。](#) 2013年8月4日 [リステラス星圏史略](#) (創作)



宝玉物語は、いつ書けるんだろう？

マシカ他、イラスト。（中2～高2ぐらい？）

マシカ他、イラスト。（中2～高2ぐらい？）

2016年2月12日 リステラス星圏史略（創作）

画像1 マシカとマリシアル。

画像2 マシカとマーライシャ。

画像3 フェルラダルと出会った年齢のマシカ。





オーク鬼の歌。 (中2?)

[『ダレムアス』 \(@中1か中2? 『指輪』を読んだ後なのは確か☆\)](#)

2006年7月21日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

○ チビゴブリンのグルーニィ 赤っ毛、角、そばかす、
大きな耳、コウモリの羽、

○ マシカのイメージはエルフィンから

○ 女神ルマルウン 紫水晶の体。

○ マシカ 深緑色と朽葉色を混ぜたような髪
星ヶ沼と同じ色の瞳

○ オーク鬼の歌。

憎む 憎む 憎むう！

オレらは憎むう

悪しき者として オレらを造った

大地を 天を

神を!!

オレらをさげすむ 全てのものを

オレらを愛さぬ 大地を 天を

したり顔して日のもと歩く

人を 神を

善なる者を!!

恨む 恨む 恨むう!!

オレらは 恨むう！

悪しき者なるオレらを造った

オレらをこの世に産みだした者！

愛さぬなら産むな

さげすむなら造るな

神を憎み 神に憎まれ
愛なき者、それがオレだ！

恨む恨む 恨むう！
オレらを産んだものを恨むう！
陽のもと 火のそば 光の中を
わがもの顔で 歩くもの

呪う 呪う 呪うう！
オレらは呪うウ
オレのからだを みにくさを
オレのこころを 汚なさを
オレら 自分で 自分を 呪うウ！
オレらを造ったものを 呪うウ！

「史実」 (?) 無視! (2016年4月8日)

「史実」 (?) 無視! (^w^:)!

2016年4月8日 リステラス星圏史略 (創作)

たった今、息抜き?がてらの家事タイムで、いつもの「今週の魔女鍋」に入れる玉ねぎを刻みながら...

思いつきのイキオイで既に決定。

o (^w^) o

いままで「何となくグアヒギルグ似。偉そう」というビジュアル以外は

「NO IMAGE」だった

「鬼王」様役...

如是さんに、やってもらおう...www♪

w (^w^;) w

だってホラ、「マシカに横恋慕する役」だし...「ろりこん」(?) だし...w

ニョゼさん出したら、どう転んだって「暗い話」にはならないし...w

ね...www

☆彡

設定【総変更！】 確定...☆ (2016年5月6日)

[『大地世界物語：皇女戦記編』...設定、...【総変更！】 確定...☆](#)

2016年5月6日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

...て、ことで、今日のコレ作業

<http://p.booklog.jp/book/105923/read>

は、一旦終了@19:45...

いやいや... (^_^;) ...

古資料の再入力作業で、予想外の時間を食われまくりましたが、大回り？したのは、ムダじゃなかった...☆

どお〜りで！ (^□^;) !

この後続く『皇女戦記編』の総構成が、いつまで経っても！

ちっとも！「うまくまとまらない」

(物語の全景が視えてこない。) と、思っていたら...☆

...w (^□^;) w...

「ここでミヤセルが死んでるはずがない。」

(マシカはそこまで愚かな小娘じゃない！)

...という、大前提が...間違っていた...w w w w w

...w (^_^;) w...☆

...なにしろ、マシカというキャラが「勝手に脳内に生まれてきた」時期と、私が『指輪物語』に大ハマリした時期が、「たまたま偶然に」一致していたため...

なにか、「美しい妖精物語は、理不尽な悲劇でなければ！」みたいな、

むだな思い込み？があって...?? (^_^;) ??

14歳の時にざっくり出来上がっていたコンセプトをそのまま再考せずに、

何度も！なんっども...！（――；）！

（細部だけ）描き直していた。というところに...

敗因があった...<（――；）>...★

まず！

《道の果ての村》は、もっと大きな、「辺境だけど、薬師のメッカ」の、村...

「マシカの育ての親のおば様は、生前けっこうな大物だった」

「マシカは《星ヶ沼》から、浮かんできた子ども」

（は、薬師内でのみ周知の事実。）

「大地世界内では、鬼族や球界系移民の子孫に差別や偏見がある」

「にも関わらずマシカは薬師（知神ヨーリャ学派）の理念として、偶然目にした鬼族の重傷の子供を（命懸けで？）平等に救助した」

（ので、鬼王に岡惚れされた...w）

「鬼王がマシカに求婚したのはマシカが可憐で気高い美少女（笑）かつ薬師として有能だったから、妃に適任。と思っただけで...宝玉の存在が目当てだったわけではない。」（存在自体を知らなかった）

「マシカは鬼族を憎んでいて、滅ぼしたかった」という旧設定は、没！

「マシカは鬼王に誘拐された後、鬼城で侍女たちや重臣たちの歓待を受けていて、必ずしも鬼族全般に対する心象は悪くなかった」（でも鬼王と結婚は嫌！）

「ミヤセルは、いきなり結婚式場に突入するほど馬鹿ではない。」

（そして剣はそんなに強くない。）（ただし、マーライシャほどではないが、「身が軽い」）

「マシカはちゃんと熟考した末に女神ルマルウンに救いを請い求め、なるべく怪我人が少ない？
形で、鬼城を封印し、脱出に成功している」

「ミヤセルは死なないし重傷すら負ってない。マシカを連れて旅だとうとするが、マシカが（村に薬師が一人しかいない時期だったので）断る」

「ミヤセルは単身で妹探しの旅を続ける」

「マシカは自分もいずれ旅立つことを予知し、後継ぎの薬師を確保して時節を待っている」

「マーライシャが《道の果ての村》に来る。」

「皇女に皇子の行く先を告げ、自分は初恋のフェルラダルを求めて旅立つ」

「《大地皇》位の継承権者が、皇妹、皇女、皇子、西の皇族たち（内部抗争あり）、前皇嫁兄フェルラダルまで入れて、諸族の心乱れの元となる」

ついでに、

「誰と誰が最終的にカップルになるのか？」（^^;）...★

という、大混戦なギャグ展開に... ???

（そもそも鬼王キャスティングがニョゼさんに決まった時点で、シリアス無理だ...www）

...w（^◇^;）w...☆

（とにかく！全部！

「大地世界の基本設定、練り直し～ッ！決定ッ！！）

◎宝玉石語 1 (ハルアキ君と「アニメを創ろう！」とかほざいていた時のメモ。)

◎宝玉石語 1

(ハルアキ君と「アニメを創ろう！」とかほざいていたコワイモノ知らずな(^^;)高校生？だけ？時代のメモ。)

2016年3月3日 リステラス星圏史略 (創作)

◎宝玉石語 1

『宝玉石語...山百合と銀の楡...』

1. 山の少女マシカ、行き倒れた飛仙族(エルフエリ)フェルラダルを救ける。
2. フェルラダル、マシカに宝玉石"ルマルウンのかけら"を渡し、『山百合』と名づけて去る。

『宝玉石語』

3. 落武者マリシアル(=ミヤセル)、妹を尋ねめぐねて"ゆきあたりの村"に来、マシカに出会う。
4. マシカ、ミヤセルと恋におちる。
5. "鬼王"の配下、遠出した2人を見かけ、王に報告する。
6. 鬼王、月祭の晩にマシカをかどわかす。
7. ミヤセル、預けられた宝玉石を懐に、鬼王城に乗り込み、深傷を負う。
8. マシカ、転がり落ちた宝玉石を使い、鬼王城に破滅をもたらす。
9. ミヤセル(=皇子マリシアル)、マシカに素性を明かし、仙女皇の白弓と妹皇女への伝言をたくして息をひきとる。
10. エンディング...草原と森のはざまをマシカは1人、立ち去って行く。
(鬼王の復活、示すか否か?)

◎悪い噂もまだこのような奥山の村へまでは広まっていませんでした。ただ不穏な空気、落ちつけぬ、熱病のようにあたりをおおっていく、よくない予感のようなものだけが、山々を支配しているのです。"~~大地母神の国(ダレマヌーダレルアス)~~と人々に呼ばれる世界の、広く平らかな"大地の国(ダレムアス)世界の、皇のおわします"美わしの白き都"(ルア・マルライン)の辺りで、それは起こりつつある事のはずでした。そして...この昔語の伝えられるミアテイネアの王の治める地方では、~~聖皇美白都からの伝令が届くまでに1年と半は...確実にかかるのです。~~

◎「あの、あたし、夢を視ました。良く判らないですけど、流れ込んで来てしまったんです。

」

☆ダレムアスの地の王や諸侯達を統べる、皇（おう）と女皇（めのきみ）のおわします美わしの白き都...その、聖皇美白都（ルア・マルライン）からは旅をすれば1年と半もかかる所に、ミアトの国の都はあったのでした。ミアトの国王は国の周辺のミアティネア地方全体の諸侯達の盟主をも兼ねます。だから、ミアティネアと呼ばれる地方全体は、南境を聖域である"大地の背骨山脈"に深く入り込ませ、北は沿海18州とティクト、

ミアトの国（ミアタス）は小さいながらも昔から隊商の要路として盛えた土地柄です。代々の国王が周辺諸侯をも取りまとめる。盟主の役割をつとめるしきたりで、人々は、その辺り一帯をひっくるめてミアティネア地方と呼び習わしていました。

ミアティネアの南辺は谷筋に沿って大地の背骨山脈に深く入り込んでいます。東南の山奥の集落と言え、殆ど、禁断の聖域マドリアウィ・滅びし上つ方の都の周囲にめぐらされた結界線、堀を接しているようなさまでした。

その、問う名んお古い古い街道の、

※ミアト・エイ＝統べる。

ネア＝地方。

ミアティネアの山人が森に入る時の普通のカッコ。(これもハルアキ君に見せる用に描いたやつ。)

ミアティネアの山人が森に入る時の普通のカッコ。

(これもハルアキ君に見せる用に描いたやつ。)

2016年3月3日 リステラス星圏史略 (創作)

ミアティネアの山人が森に入る時の普通のカッコ



しよいこ 背負ったり

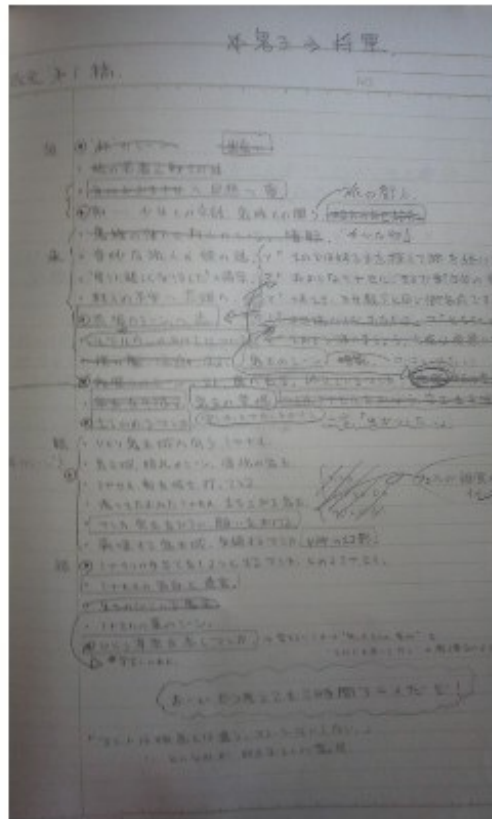
かご持ったり

男女共通。(男はスソが短め。)

期節によって蛇追い鈴をつける。

深めの鹿ぐつ。

手っ甲、脚絆はは、場合によりけり。



改定第 1 稿

起

- ◎ "杯"のシーン [出会い]
 - ・ 旅の若者と戦士の話
 - ・ ・ 気にかかる少女 ~回想 ~夢
 - ・ ◎ 朝 ... 少女との会話。鬼族との関わり。
「旅の御方」相方の自己紹介

承

- ◎ 鬼族の使いと村人のシーン。暗転。「イヤな戦！」

◎ 奇妙な旅人と妹の話。

- ・ (段々に親しくなりました) の描写
マ「それでは妹さまを探して旅を続けて...」
マ「おかしなミヤセル。まるで御自分の名前...」
マ「妹さま、王女殿下と同じ御名前ですね」
ミ「不思議な人だ、あなたは」
マ「そちらこそ」
マ「さぁもう帰りましょう。今夜は夜祭だわ」
- ・ 村人の不安 ～ 花畑へ。

◎ 花畑のシーン ～ 恋。

- ・ 「ルマルウンのかけら」について

◎ 使い魔、注進に及ぶ。

- ・ 鬼王のシーン、暗転。(ロリコンおちょくり)

◎ 夜祭のシーン。2人、庭へ出る。怯えているマシカ。夜祭の折の会話。

- ・ 宝玉を手渡す。

◎ 鬼王の登場。一言、「虫がついた」

- ・ マシカ、ミヤセルをかばう。
- ・ さらわれるマシカ。

転 ("城"のシーン)。

◎ ひとり鬼王城へ向かうミヤセル。

- ・ 鬼王城、婚礼のシーン。満悦の鬼王。
- ・ ミヤセル、剣を抜き、打って入る。
- ・ 傷つきたおれたミヤセル。立ち上がる鬼王。

◎ (フェルの視覚的イメージ。フェルのえびそおどのだんぺん)

- ・ マシカ、宝玉をひろい、願いをかける。
- ・ 崩壊する鬼王城。気絶するマシカ。女神の幻影。

結

◎ ミヤセルの手当をしようとするマシカ。とめるミヤセル。

- ・ ミヤセルの告白と遺言。
- ・ ミヤセルの墓のシーン。

・ ひとり草原を歩くマシカ。(⇒要するにこれは "失ったものの重み" と "それでも歩いて行く" の感情なのよね)

◎ 生きのびている鬼王。

☆ 鬼王 ⇒ 将軍。

おいどう考えても2時間アニメだぞ!

(「転結」だけでストーリーにすることも可能だ。)

「アニメは映画とは違う。ストーリーは要らない。」
...というのが紀久子さんの意見。

マシカを巫女という身分に規定すると
またまったく違った心象 (ストーリー) が
浮かび上がってくる。

※ストーリー優先か、フィーリング優先かで、省略の仕方は違ってくる。

- ★ 若者と少女と鬼、か
- ★ 若者と妹と少女、か
- ★ 若者と少女と鬼と村人、か。
- ★ 若者 (と妹) と少女と鬼。

(この場合すでにエルフエリ完全無視)

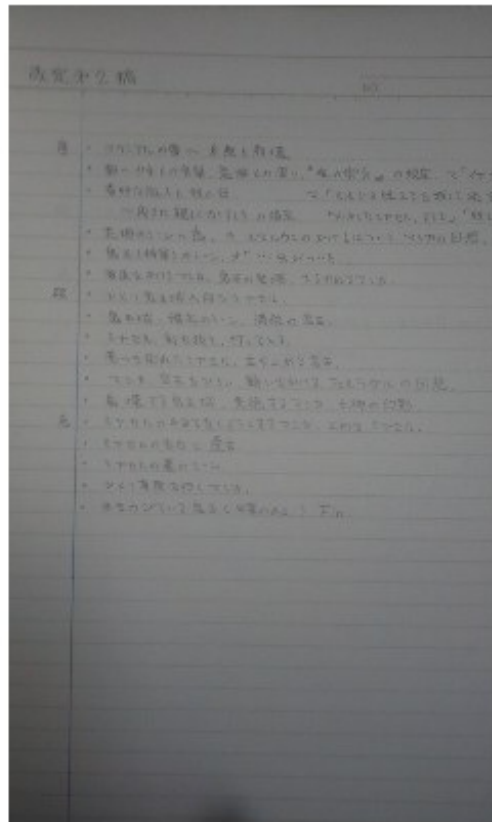
- ★ 少女と女神と若者と鬼?

...これはまったく本当に別の話だ。

宗教論をやる気は今のところ (このアニメでは) ないのよ。

☆ 説明をほとんど入れず、暗くならず原作通りの終末にもっていくにはどうした

らいいか。



改定第2稿

序

- ・ マリシアルの夢～追想と崩壊
- ・ 朝～少女との会話。
鬼族との関わり。
『旅の御方』の規定。
マ「イヤな戦！」
- ・ 奇妙な旅人と妹の話。
マ「それでは妹さまを探して旅を続けて…」
- ・ ～段々に親しくなりました、の描写。

マ「おかしなミヤセル。まるで、」

マ「妹さま、王女殿下と」

- ・ 花畑のシーン～恋。⇒ルマルウンのかけらについて、マシカの回想。
- ・ 鬼王（将軍）のシーン。
オ「虫がついた。」
- ・ 夜道をかけるマシカ。鬼王の登場。さらわれるマシカ。

破

- ・ ひとり鬼王城へ向かうミヤセル。
- ・ 鬼王城、婚礼のシーン。満悦の鬼王。
- ・ ミヤセル、剣を抜き、打って入る。
- ・ 傷つき倒れたミヤセル。立ち上がる鬼王。
- ・ マシカ、宝玉をひろい、願いをかける。フェルラダルの回想。
- ・ 崩壊する鬼王城。気絶するマシカ。女神の幻影。

急

- ・ ミヤセルの手当をしようとするマシカ。とめるミヤセル。
- ・ ミヤセルの告白と遺言。
- ・ ミヤセルの墓のシーン。
- ・ ひとり草原を歩くマシカ。
- ・ 生きのびている鬼王（字幕のあと）。

F i n。

別稿 1. (専門学校～同人誌時代)

別稿 1. (専門学校～同人誌時代)

2016年4月8日 リステラス星圏史略 (創作)

別稿 1.

序

- ・ 少女が鬼王をつっぱねている。
- ・ 通りがかった旅の若者。
- ・ 恋におちる。

破

- ・ 不機嫌な鬼王。
- ・ 不思議な宝玉。
- ・ さらわれるマシカ。

急

- ・ 鬼王と戦う若者。
- ・ 宝玉を投げるマシカ。
- ・ The Happy END.

(これだと10分ですな。セリフなし。)

- ・ (or片腕になった若者と抱きあう少女) ←この方がまだ原作に近い。

『山百合と《緑の木洩れ日》』

「どうしても行くの？マシカ」 （たぶん小学6年？...

[「どうしても行くの？マシカ」](#) [（たぶん小学6年？...一番最初の設定...??）](#)

2016年1月29日 [リステラス星圏史略](#) [（創作）](#) [コメント\(1\)](#)

「どうしても行くの？ マシカ」

夜明け前の草原で、マーシャが聞きました。

「はい、姫さま。あたしには、どうしても、しなければならぬことがありますから。」
彼女たちの一行は、

（リレクス＝鋭）

（マダロ・シャサ＝雄輝）

「この、しょうにゆうどうの入り口は、村の薬師（くすし）たちしか知りません。」

松明をかかげて先頭に立っているマシカが言いました。

「それに、山の向こうまで抜ける道は、わたしが一人で見つけ出したのです。」

「とはいえ、急ぐことにしましょう。鬼王（ダム・グルガ）の里には鼻の利く人狼が大勢交っているということですから」

「出口につくのはいつごろになるの？」と、マーシャ。

「はい、姫さま。うまく行けば明日の夜明けまでには。」

それからあと、またしばらく静かになりました。

聞こえるものはみんなが歩くたびに起るかすかなカチャカチャいう音と、天井からしたたる水の音だけです。

それが広い石灰どうにこだまして低いたえまないブンブンいう音になって聞えました。

松明の光が壁にあたって、美しい形のしょうにゆう石を照しだしているのです。

時折り、みごとな自然の彫刻を見つけたときの「あら」とか「みてごらん」といった短かいかん声以外、なにも話すことなく4人はかなりの速度で歩きつづけていました。

1～2時間はたったでしょうか。

不意にマダロ・シャサが静じゃくをやぶりました。

「追手の気配はないようだな。」

「ああ。」と、リレクス。

「危ない所を救ってくださって感謝します。あなたがいなければ、わたしたちは今頃、鬼王の手下につかまっていたでしょう。

けれど、あの…」

マーシャはここでちょっと口ごもりました。

「わたしがダレムアスの王女かも知れないということを知っているあなたはだれなのです？
また、それをなぜ知っているのですか？ わたしは旅の間一度として名前を明かしたことはなし、あなたと会ったのは今日が初めてです。

たぶんあなたも、そうなのでしょう？ あの時のあなたを見るかぎり、あなたは、だれかにわたしの特ちょうを聞くか、絵姿を見せられるかして、わたしの偽名とわたしの来ることを前もって知らされていたようですね。」

「ええ」と、マシカはうなずきました。

その目は暗く、声はしずんでいました。

「わたしは知っていました。わたしの名はマシカ・サラ。

マーライシャ様のことは、五年前、マーリシャルさまにお聞きしました。」

「お兄様に!!」 マーシャの目はぱっと輝きました。

「そ、それで、お兄様は今、どこにいらっしゃるの？」

「…亡くなられました。」

さっとマーシャの顔が青ざめ、マシカの顔はいよいよ暗くなりました。

「すべてお話ししましょう。始めから終わりまで。」

マシカはほとんど聞きとれないほどに低い声で言いました。

「それが後にのこされたわたしの役目なのですから。」

そういつて、マシカはその長い物語りを語り始めました。

ルマルウンのかけら、という宝玉をご存じですね？

このはなしはわたしがこの珠を手に入れたことから始まるのです。

今から数えて7年前の、ちょうど花祭りの頃でした。

わたしは一人で山の湖まで、祭りのぎ式に使う薬草を取りに行ったのです。

そしてそこで不思議な方に出会いました。

いいえ。それはマーリシャル様ではありません。

空を行くエルファリ族の騎士で、月の女神の神殿へ行く、王宮からの急使だと言いました。

肩の傷の手当てのためにひと気のない湖に降りたのです。

わたしは村の薬師の一人としてそのまま見すごすわけには行きません。

そのエルファリの傷はひどいもので、人間の薬がエルファリ族にも利くものかどうかはわからなかったのですが、とにかくわたしの家へおつれして傷の手当てをしました。

そして、七日後、まだ傷も治り切らぬうちにそのエルファリは旅出とうとしました。

引きとめるわたしに、彼は、おそろしいボルドムの悪鬼たちによってダレムアスの王の中の王

ダリアム様とそのお妃のエルフェリヌフ（エルファリ族の女性）、フェイリーシャ様が殺されたこと、王子マーリシャル様も行方不明で、王の都には今やボルドムの悪魔たちがたむろしていることを教えてくれました。

『戦いが来る』と彼は言いました。

ダレムアスが、かつて味わったことのない、長い苦しい戦いが来るのだと。

最後に彼は、小さな弓と"ルマルウンのかけら"を、わたしにわたして言いました。

『平和な時であれば、使命を果たしたあとに戻ってきてあなたにふさわしいお礼をさし上げることもできるのだが、嵐が来ようとしている今はそれもできません。』

また、これからは身を飾る物よりも危険から身を守る物のほうがより必要とされることになるでしょう。』

『...これはエルフェリヌフの使う魔法の弓です。わたしの妹の形見なのですが、あなたにさし上げましょう。』

それからこれは"ルマルウンのかけら"です。

今この珠の由来を話しているひま

(未完)

(借景資料集)

<http://85358.diarynote.jp/201711011803052401>

コメント



[霧木里守≡畑楽希有 \(はたらけきあり\)](#)

2017年11月1日21:41

...何故か？こんなものを見つける...☆

https://www.jalan.net/kankou/spt_guide000000180901/

マ鹿工房



[霧木里守≡畑楽希有 \(はたらけきあり\)](#)

2017年11月1日22:44

地形がまさに「道の涯の村」だし、あたりの景色も「まんまくりそつ！」なので...

いつか本が出せたら、絶対なにかコラボしてもらおう...♪

〇(^w^)〇

リステラス星圏史略 古資料ファイル

4 - 2 『宝玉物語』

<http://p.booklog.jp/book/105923>

著者：霧樹里守 & 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105923>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105923>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ